

放送人の会

No.81

2018.6.8

〒102-0094 千代田区紀尾井町1-1 千代田放送会館 3階 Tel & fax 03-3221-0019 Mail info@hosojin.com発行 一般社団法人・放送人の会 会長 今野 勉
菅野高至 (HP担当)、逸見京子、前川英樹、松尾羊一編集担当 伊藤雅浩 (広報委員長・編集長)、鈴木典之、
事務局 千葉邦彦 須斎恵美子

2018年度の始まりにあたってふたつのこと

放送人の会 会長 今野 勉

5月19日に放送人グランプリの贈賞式があった。29・30日には日韓中テレビ制作者フォーラムの準備会議が韓国・光州市で開かれた。

放送人グランプリ贈賞式については本号別面の特集に譲るとして、今後のあり方について会員の皆さんへのお願いがあるのでこの欄に書かせていただくことにする。

日韓中テレビ制作者フォーラムの主催・参加を日本・放送人の会としては2020年以降、取り止める旨を韓・中両国に対して通知したことは会員の皆さんには既にお知らせしているが、今回の光州での準備会議での韓・中両国の反応はどうであったか、その第一報を記しておこうと思う。

いずれの話も、放送人の会の将来にかかわる話である。共通するキーワードは「参加」である。

1、放送人グランプリは、会員の推薦から始まる。会員の参加は、贈賞式で受賞者に拍手し声をかけることで終わる—と思うがどうだろう。

いや、多くの番組を見てその中から書面を以って推薦する、というだけでも、会員にとっては大変な負担なのである。総会に参加し、贈賞式にも出席するというのはなかなか難しい—という反論が挙がることは容易に想像

がつく。私もそう思う。

それでも、今年の贈賞式に立ち会った身からすると、すべての受賞者が、先輩でもありかつ仲間でもある放送人の会員に対して、率直に受賞の喜びの言葉を述べ、番組制作にあたってのさまざまなエピソードを熱く語るのを見ると、もっと多くの会員が彼らに拍手しエールを送り話しかけたりすることができれば、彼らにとってどれほど励みになることか、喜びになることか、と、つい思ってしまうのである。

私はテレビ関係の贈賞式にはかなり立ち会っている方なのだが、受賞する制作者や贈賞した選考者が、放送人グランプリほど多くの言葉を発する贈賞式を知らない。放送人グランプリは、その意味で、「参加」の贈賞式なのである。

というわけで、会員の皆さん、来年の放送人グランプリには、是非、参加していただきたいのです。書面で投票してもしなくても、投票した番組が受賞してもしなくても、贈賞式に出ること（参加すること）が大事なのだと本心から思うのです。

2、日韓中テレビ制作者フォーラムに参加しないことで、放送人の会の未来はどうなるのだろう、と光州で考えた

「光州事件」とは、1980年5月18日、韓国光州市で、軍事独裁政権に対する反対運

動に立ち上がった学生・市民に対して、軍部が大虐殺を加えて鎮圧した事件である。死者は190人前後にのぼった。その後、反対運動は全国に広がり、1993年、軍事独裁政権は倒れ文民政府に変わった。光州事件は、韓国民主化の発火点であった、として、今、光州市には、光州事件を記念する国立の施設が多く見られる—ということを、実は、今回の準備会議で私たちは、韓国PD連合の皆さんのガイドによる施設ツアーで知らされた。

光州でフォーラムをやるからには、というPD連合の想いの深さは相当のものだった。そのあたりのことは、後ほど皆さんに別の形で報告する予定である。

そうした雰囲気の中で、私たち日本・放送人の会は、なぜフォーラムへの参加を止めることにしたのか、切り出さなければならなかった。私たちは、日本の放送人の会の設立のいきさつから説明を始めた。そして個人参加の日本・放送人の会は、韓国のPD連合や中国のテレビ芸術家協会とは、その設立目的や、拠って立つ経済的基盤が違ふことを説明した。韓国、中国は、私たちの説明を受け入れた上で、規模を小さくしてでも続けられないのか、と提案してきた。確かに参加するだけで、光州事件の生々しい現場を知ることが出来る。放送人の会は、何をやりたくて作られたのか、これから何をやるべきなのか、あらためて、それを考えることになった準備会議であった。



西村与志木氏 横井秀信氏 三村忠史氏 岡田朋俊氏 城光一氏 高橋秀樹氏 富山雄一氏 石井玄氏 西村陸平氏
山田桃子氏 天川恵美子氏 八木康夫氏

常岡眞衣氏 加藤拓氏 内山聖子氏 右田千代氏 小林克也氏 今野勉氏 稲葉寿一氏

放送人グランプリ2018

◆グランプリ◆

NHKスペシャル 「戦慄の記録 インパール」

「本土空襲 全記録」

「731部隊の真実」エリート医学者と人体実験

「樺太地上戦 終戦後7日間の悲劇」

◆準グランプリ

「オールナイトニッポン」50周年

◆優秀賞

「ゴンザレス世界最初の露日辞典を作った男」

◆特別賞◆

小林克也

◆特別賞◆

「眩々北斎の娘」美術スタッフ

◆企画賞◆

「緊急SOS!池の水ぜんぶ抜く大作戦」

〈第4回大山勝美賞〉

内山 聖子

テレビ朝日ドラマ制作部 ゼネラルプロデューサー

加藤 拓

NHKエンタープライズ エグゼクティブプロデューサー

放送人グランプリ2017の授賞式は5月19日(土)、午後3時から、千代田区紀尾井町千代田放送会館2階ホールで行われた。以下は式次第の順にそつての記録である。式の司会進行は藤田知久氏(会員)。

大山勝美賞と今回の選考経緯の説明

八木康天選考委員長



昨年まで石橋冠さんが委員長でした。私はTBSのドラマ班で大山さん、久世さん、柳井さんなどは先輩です。大山賞の選考委員長が私で務まるかと心配です。

すが、頑張ります。今日は大山勝美さんの奥様の渡辺美佐子さんにおいでいただいて贈賞をしていただきます。

大山さんは長年ドラマのディレクター、プロデューサーをやつてこれ、ドラマのためにと基金を出されて大山賞ができました。原則としてプロデューサーから一人、ディレクターから一人を選んでいます。選考委員は堀川とんこうさん、鶴橋康夫さん、石橋冠さん、西村与志木さん、五十嵐文雄さん、鈴木嘉一さん、そして私です。

今回プロデューサーとして内山聖子さん、ディレクターとして加藤拓さんを選びました。選考会議ではほとんど議論がなく満場一致で

決まりました。お二人のご活躍はそれだけ傑出しています。

内山さんはこれまで数々の賞をとられていて、今更という感がありますが、「ドクターX」は民放の連続ドラマの多くが苦戦するなか毎回20%を越えています。私は同じ仕事をしています。「凄いなあ」と思います。それだけでなく、山田太一さんの社会派ドラマを手掛け、幅広くやつておられる。大山賞は単年度の作品だけを対象に考えるのではなく、これまでの作品も対象に選考しますので、文句なしに内山さんに決まりました。

加藤拓さんは「眩(くらら)」で芸術祭賞は多くの賞を受賞されています。「眩」は昨年度の単発ドラマのナンバーワンだと思います。加藤さんは「坂の上の雲」、「精霊の守人」など、NHKを代表するドラマの責任者をずっとやつてこれました。民放にいとあんなドラマができるNHKは羨ましいと思いますが、演出も実に素晴らしい。加藤さんの受賞も満場一致で決まりました。

今野勉会長挨拶



受賞者の皆さんおめでとございます。いま、大山賞については八木さんから話があったので、私は放送人グランプリについて話します。

リは名前の通り、放送人が放送人に贈る賞です。仲間の健闘を称える、放送人の会の私たちはOBが多く、先輩が後輩に贈る感じになっていますが、気持ちとしては、いい仲間が作つたいい番組に同じ仲間として賞を贈りたいというのが、最初の趣旨です。

今年は異例のことですが、NHKスペシャルが4本まとめてグランプリをとることになりました。他の賞でもこんな形の受賞は例がありません。1本にしなければならなかったことありますが、あの4本の作品が持っている力はそれぞれ違う歴史的事件の本当のところにそれぞれが辿りついたところにある。これまでの通説を覆し、深く、歴史観を変える力があつた。

歴史の事実をつきとめることは難しいこと、特に日本には戦争の記録がほとんど残っていないので難しい。そのことを戦争だからしょうがないと思いがちなのですが、日本と同じ敗戦国だったドイツでは国の汚点となる強制収容所の記録を膨大な量残している。そのためドイツは想像で糾弾されるのではなく、正確な事実に基づいた、やつたことに見合った非難をされた。ドイツが立ち直るきっかけはこれです。ドイツは率直に反省することができ、世界に尊敬された。一方日本は4つの歴史的事件について70年目にNHKスペシャルでやつと真実に辿りついた。よくぞやつてくれたと思います。しかし、あれほどの事件について日本の公文書記録が全く残っていない。辿りつくのに70年、この70年はいったい何だったのかと思います。Nスベの4本の作品は歴史とは何か、記録とは何か、放送の役割は何かを深く考えさせてくれました。

今回の表彰は非常に印象深いものになったと思います。

放送の役割には娯楽もあり、今年度も素晴らしい仲間の素晴らしい作品に出会えました。あらためて受賞者の皆さんにおめでとうを申しあげます。

大山勝美賞表彰

プレゼンター 渡辺美佐子さん

今野 勉会長

加藤拓氏

〈表彰状〉ドラマ「眩(くらら)」北斎の娘」において、極めて優れた演出力を示しました。主演である北斎の娘・お茶を演じた宮崎あおいを始めとして多彩な俳優陣の演技の引き出し方は見事でした。またこのドラマの根幹といえる「光と影」を表現した美術・技術を結集した統率力も見逃すことは出来ません。最近ではあまり制作されなくなつた一話完結の単発ドラマでこの成果を生み出したことを高く評価すると共に、今後のさらなる活躍に期待を込めてこの賞を贈ります。

【講師】石橋冠氏

石橋 講評をしろと突然言われたんです。おめでとございます。

京大経済学部を出て、何故ドラマなんですか？一度、聞きたかつたんだ。

加藤 経済学部でもマルクス経済学で、どちらかというと哲学の方で、浅田彰さんの話など聞いているうち、そちらの方へ…

石橋 「眩」は素晴らしい。加藤くんの映像はリアルを追求しながら、エンターテインメント性を持つ映像で、感心していました。



特に「坂の上の雲」の日露戦争の海戦シーンは、あなたじゃなくては撮れない。「精霊の守人」、「八重の桜」……どちらかと言うと戦闘シーンが好きですね。

加藤 いや、そんなことはなくて、本当にまだまだです。

石橋 大掛かりでダイナミックな演出をするのは、君をおいてほかにない。

大山さんを存知ですね。

加藤 はい。

石橋 エグゼクティブ・プロデューサーで演出はしないの？

加藤 いえ、やる予定はあつて…

石橋 やりたいんだ。ではまずまず、がんばって豊かな映像を見せてください。

宮崎あおいさんの演技は素晴らしい。あなたは抒情性も持っている演出家ですね。

おめでとございます。

【受賞者の言葉】

加藤 素晴らしい賞をありがとうございます。「眩」という番組で賞を頂いたのは大変嬉し

いのですが、「眩」のほかにこれまでの作品を評価していただいたのも嬉しいです。いま、ここで石橋さんにお言葉を頂いて幸せな気分です。

20年ほど前ですが、私は「カズモ」へNHKから一人だけ行つて、大山さん、石橋さんの下で「茂七の事件簿」という金曜時代劇をやりました。大変幸せな期間で、ものごとが、これだけ楽しく、美しくドラマになつて行くことを体感した、充実した期間でした。石橋冠さんがチーフ、私がセカンドで、ドラマができるのカズモの部屋で先輩方から意見をいただきました。堀川とんこうさんからいただき、次に大山さんからいただき、演出とは何かを叩き込まれました。これはNHKに戻ってから大変な力になりました。

西村与志木さんには若いときからお世話になりました。

そうした大きな流れの中で女優、俳優、スタッフに恵まれて嬉しい経験をしました。

いま、プロデューサーの肩書はありますが、これからどんな形でもドラマを良くしたい、放送を良くしたいと思っています。よろしくお願いします。

内山聖子氏

《表彰状》「黒革の手帖」以来、主演の米倉涼子とタッグを組み、異色のヒロインが男社会の中でも颯爽と活躍する姿を描いてきました。特に、「ドクターX〜外科医・大門未知子」は人気シリーズに育てられました。

その手腕と高く評価すると共に、今後のさらなる活躍に期待を込めてこの賞を贈ります。

【講師】鈴木嘉一委員



審査会で内山さんの名前があがったとき、「今更」と、受け取って貰えないのではなかないかと心配の声がありました。が、受け取ってくださいとのことでほつとしております。

内山さんの活躍はこの世界で知らない人がなく、放送人グランプリでも山田太一さんの「時は立ち止まらない」でグランプリをとっていますし、遅きに失した、の意見もありましたが、いずれは差し上げるべき人なので、この機会となりました。

大山さんは非常に幅のある人で、「ふぞろいの林檎たち」のようにヒットメーカーである一方で、芸術祭受賞作も作り、NHKの番組も作った。内山さんについては「米倉涼子とタッグを組み…」と受賞理由にありました。が、内山さんはテレビ朝日のドラマ部門で最初の女性プロデューサーです。ある意味で旧弊な男社会のドラマ部門にあつて、黒革の手帳 以来の米倉さんのキャラクターに内山さんは自分自身を重ねていたのではないか。それと作品の幅の広さが表彰の理由です。

大門未知子の決め台詞は「致しません」と「私、失敗しないので」です。内山さんは「必殺仕事人」のスタッフにも名前があります。スペシャルドラマのほとんどにもそうです。内山さんはやはり失敗しないのでしょう。そ

んなわれわれの思いをこめて賞を贈ります。おめでとございます。

【受賞者の言葉】



内山 大変光栄です。ありがとうございます。いま鈴木さんから嬉しいお言葉を頂きましたが、私は20数年前、テレビ朝日で初の連続テレビドラマを作ったときに視聴率が

コケで、大失敗から始まっています。よくも会社は我慢して私に仕事を与えてくれたと思います。

多くの賞をいただいています。が、決して個人でいただいているわけではなく、作品でいただいています。長くやってきたので、今回この大山賞をいただきました。長くやってきてよかったと思います。

選考してくださった方は、あこがれていた方たちで、そんな方に選ばれたというのが嬉しいのですが、授賞の電話をくださったのがあこがれているTBSの八木さんでした。局が違うので一緒に仕事をしたことはないのですが、テレビで見て、こんなドラマが作れればいいなあと思っていました。そんな方に褒められるのは本当に嬉しいです。

長年やってきて、体も心も疲れてきて、プロデューサーの仕事も後輩に譲らなくてはいけないと思っていた時にこの賞をいただきま

した。もう少し頑張れということだと思ひ、仕事にもうしばらくがみつこうと思ひます。本当にありがとうございます。

渡辺美佐子さん挨拶



大山がいなくなつて4年になりますが、毎年放送人の会の皆さんがこうして大山の名前を出してくださつて、皆さんに思ひ出していただけに本当に嬉しいです。

本日は、加藤さん、内山さんおめでとうございませう。

大昔に矢代静一さんの「北斎漫画」という舞台をいたしました。緒形拳さんが北斎を娘は今井和子さん、私は北斎のモデルになる変な女を演じました。3年ほどかけて全国をまわつた思ひ出深い作品です。そのため、テレビで北斎の娘のドラマをやつてゐるのを思はず見てしまいました。そのときは加藤拓さんのことは知らず、北斎と娘の画面を食い入るように見ました。素晴らしい作品で、芸術家はすごいなあ、と思ひ、いまも画面の記憶が残つてゐます。その制作者の方に大山の賞を差し上げることができて、本当に嬉しいです。内山さんの「ドクターX」は毎回ほとんど見ております。最後お決まりで成功するのは分かつてゐるのですが、出てくる俳優さんが皆さん魅力的です。最後に、メロンを持つて

きて法外なお金をおつさらつて踊りながら帰る、あの役（岸部一徳）が大好きです。また面白い作品を是非作つてください。今日はお二人、おめでとうございませう。

放送人グランプリ選考終結

西村与志木選考委員長



放送人グランプリは今年で17回目です。歴史はありますが、人間でいへば17歳はまだ生意氣盛ります。私たちは賞をやらんちやに考へて行きたいと思つて今年の選考に

なりました。

選考のプロセスを説明しますと、まず会員有志による下馬評座談会があります。今年は1月16日でしたが、有志が集まつて、「今年度はこんな番組があつた」「賞をとるのはこの番組じゃないか」などわいわい、がやがや話をし、それが2月発行の会報に掲載されます。会員のみなさんには会報に同封して推薦用紙を届けます。会員の皆さんは下馬評座談会も参考にしながら、今年1年に心に残つた作品、制作者を推薦します。推薦は3月15日締め切りです。今年は40通を超える推薦がありました。そのあと、3月30日に選考委員に集まつていただいて選考委員会を開き、決定しました。

今年の賞には3つの特徴があります。一つ

は、グランプリに4作品を一挙贈賞としたことです。グランプリの歴史の中で初めてのことで、この形の表彰は非常に意味のあることだと思ひます。ちなみに、グランプリの対抗馬として接戦を演じたのは先ほど大山賞を受賞した加藤拓さんの「眩ぐくら」です。

もう一つの特徴は地上波の放送ではない番組の表彰です。番組の評価はどうしても東京中心、地上波の放送で見たものが中心になるのですが、今年、九州を中心に展開しているC A T VのネットワークのB T Vが制作した「ゴンザ」を表彰します。C A T Vから選ばれたのは初めてです。

そして、特別賞として2部門を選びました。ともにこれまでにないものです。その中にラジオのDJの小林克也さんが入つてゐます。ラジオは準グランプリに「オールナイトニッポン50年」が入つてゐます。ラジオが2つ受賞してゐるのは画期的なことだと思ひます。

毎年、いろんな賞を出していますが、「今年はこのふうのを見つけたのか」と皆さんが思ふような、今年の顔になるような、そんな作品を選んだつもりです。

これから表彰式です。よろしくお願ひします。

放送人グランプリ表彰

企画賞「緊急S O S！池の水ぜんぶ抜く大作戦」

〈表彰状〉この作品は「池の水を全部抜く」という単純明快な仕掛けで、大量発生してゐる外来種を駆除しただけでなく、住民の地域への愛着を呼び覚ます好結果をもたらしてゐま

す。「世界の果てまで行かなくてもワクワクはある！」という企画の発想は、他の模範となるものであることから、企画賞を贈ります。

【講師】日笠昭彦委員



私は初めてこの表彰式の贈呈側になりました。私は日本テレビのN N Nドキュメントを長く担当してききました。社内では認められるとか褒められるとかはあまりありません。会

社の中で隅つこの席にゐます。それが、番組の放送が終わつてしばらくして、放送人の会から表彰するといわれて、こんな席で賞を貰つて大変励みになりました。スタッフにも次への原動力になつてゐました。今日、贈呈側に回つて感慨深いものがあります。

「池の水全部抜く」は明快な番組です。最近、わくわくどきどきする番組がバラエティでも情報番組でもちよつと減つてゐる。子どものころはテレビの中からワクワク感、ドキドキ感を感じ取つて、自分の知らない世界に飛び込んでゐたものです。表彰状の文面にありますが、世界の果てまで行かなくても足元にワクワクするものはあつたのです。それに、この番組では、地元の人々の地元の愛着や、不安の解消などいろんな要素がこめられていて、好感を持つてゐることができまし

た。正月に二桁の視聴率をとって、4月からレギュラーになるとのことですが、そうなる和外野の声がたくさん聞こえてきて、番組として守りに入ることがよくある。そこは頑張つて、突っ張つて、気持ちのいい番組を続けて欲しいと思います。われわれにドキドキを与えてください。

おめでとつございます。

【受賞者の言葉】 西村陸平氏

ありがとうございます。
ます。

今年4月から番組がレギュラーになり、放送は明日で、スタッフはいまM Aルームにこもつてナレーション録りなどをやるので、私一人が抜け出してきました。



昨年始まつてから、皆さんに凄く注目していただきました。お褒めの言葉もお叱りの言葉もあつたの1年だったのですが、レギュラーになり、これからロンドンブーツの田村淳さん、ココリコの田中直樹さんなどと一丸となつて面白いチャレンジングな番組を作つて行きたいと思います。よろしくお願いします。

優秀賞「ゴンザ」世界最初の露日辞典を作つた男」

《表彰状》300年前、ロシアで露日辞典が発刊され、日本語学校が創設されました。それには、嵐のためカムチャツカ半島に漂着し、

日本に戻れなかつた薩摩の少年「ゴンザ」が携わりました。

ゴンザのロシアでの軌跡を追つた番組は、地域の歴史を再発見すると共に、ユニークなロシア紀行番組を作り上げることになりました。その獨創性を讃え表彰いたします。

【講評】河野尚行委員



この会場にいる方で「ゴンザ」という番組を、ご覧になつた方はほとんどないと思いますので、若干時間をいただいて、番組の概要と番組が受賞に至つた経緯を説明します。

大黒屋光太夫や高田屋嘉兵衛がロシアに漂流した物語は教科書にもあつてご存知だと思いますが、それよりかなり前、薩摩の11歳の少年がロシアに流されて、日本に帰れないまま短い人生を終えます。その少年が今も日本とロシアに大きな影響を及ぼすような事業をやつています。それをロシアの地で追いかけた番組がこれです。1730年代、薩摩のゴンザと呼ばれる少年が薩摩から大阪へ荷物を運ぶ船に父親のお供として乗り込む。その船が大嵐にあつて、半年間北太平洋をさまよい、カムチャツカ半島に漂着する。ベーリングが後のベーリング海峡を調査していた時期です。16人いた乗組員のうち助かつたのは11歳のゴンザと35歳の男の二人だけです。彼らは広大なロシアの大

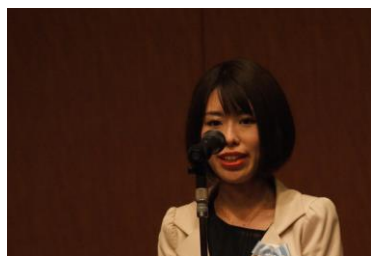
地を横断して、西の涯で、ピョートル大帝が建設したばかりのサンクトペテルブルグに辿りつき、この港町で生涯を終えます。相棒は6年くらいで死に、残されて18歳になったゴンザはこんなに厚い（15センチほどの）辞書を作ります。収容語数は1万5千。それから露日日常会話集、文法書も作ります。同時にロシアで日本語学校の先生をやる。この日本語学校はゴンザが死んだあとバイカル湖のほとりのイルクーツクに移され、その学校の精神をロシア言語大学イルクーツク校が引き継いでいます。

この番組のディレクターは鹿児島にあるCATV局BTVの常岡さんですが、リポーターはロシアの若い女性二人です。このロシア女性たちはイルクーツク校の卒業生で、ゴンザの精神を受け継いでいます。しかもこの二人は臨時に雇われたのではなくBTVの正規の社員なのです。ふだん九州の南でコミュニケーション番組を作つている社員です。この二人が常岡さんと一緒にロシアに行つて、ゴンザの跡を訪ねるという番組です。

BTVは宮崎県の都城に本社があり、鹿児島に二つ支局を持ち、イルクーツクの局とも提携を結んでいる。隣国のモンゴルとも提携を結んでいる。更に東南アジアの小さな国とも提携を結んでいて、日頃から番組のやりとりをしている。いま地方の放送局は経営の苦しいところが多々ありますが、ここはグローバル時代のコミュニケーション放送をしつかりやつていく。各地の編集権をしつかり持ち、地域の歴史、産業、人々の生活、スポーツなど徹底的に取材しています。そういう精神が、今回のロシアに行つて、地元の放送局と共同

取材をし、地元の歴史を深堀りした「ゴンザ」という番組を生んだのです。われわれがほとんど知らない世界を教えてくれたこの番組を放送人の会では是非表彰しようということになりました。

【受賞者の言葉】 BTV・常岡眞衣氏



素晴らしい賞をいただきまして、ありがとうございます。

鹿児島島の田舎で、凄いなあと感じながら見ている番組を制作していらつしやる方々が先ほどからすぐお隣に

らつしやつて、興奮しています。

弊社は世界の人々と友情を交わそうという企業理念を持っています。それで、ロシア、中国、モンゴルなど海外からの社員がいて、一緒に番組を制作しています。私たちのCATVのエリアは宮崎県と鹿児島県の一部で、非常に狭いのですが、この賞をいただいたことで、もっと広い地域で番組を見ていただけるようになると期待しています。

私は初めて特別番組を企画制作し、賞をいただきました。

ゴンザの取材を進めていますと10代で亡くなつていくことがわかりました。彼のやつたこと、偉大さに触れて行くなかで、だんだん彼をいとおしく感じるようになりました。いま思い出しても涙が出そうなのですが、本

当に素晴らしい仕事をした人で、初めて露日辞典を見たときは感激でスタッフの半分以上が泣きました。そんな気持ちで番組をつくりました。できるだけ多くの人にゴンザという人物を知っていただきたいと思います。

この賞は本当に嬉しいです。ありがとうございます。

特別賞「眩く北斎の娘」美術スタッフ

《表彰状》「眩く北斎の娘」は非常に完成度の高いドラマでした。加藤拓氏の演出、宮崎あおい氏らの演技と並んで、とりわけ称賛に値するのがその美術です。

照明と相まって《陰影》を象徴的に表現した大道具や、小道具の浮世絵の緻密さなどからスタッフの作品に対する熱い思いを感じさせました。その労を讃え表彰いたします。

【講師】八木康夫委員

僕はドラマのプロデュースをずっとやっていますので、ドラマにすぐ目が行くのですが、昨今は制作費が削られてきて、特に美術にシワ寄せが来ています。その中でNHKの美術が素晴らしい。「眩」に限らず、朝ドラも「精霊の守人」もそうです。ドラマにとって美術は非常に重要です。

「眩」の美術は大道具がオリジナルというか、リアリティーを無視して、何かを参考にしたものでない、デザイナーの大胆な発想で作られている。とはいえ、浮世絵作家の親子のドラマですから、絵を描く場のリアリティーは求められる。つまり大道具のオリジナルと小道具のリアリティーの調和が凄く良かった。

とにかく画家のドラマだからすべてのカットが絵画的で、加藤拓演出もあると思います。が、美術の果たした役割は大きい。素晴らしい美術だったと思います。おめでとうございます。

【受賞者の言葉】稲葉寿一氏



本日はありがとうございます。私はNHKにいましたが、現在フリーのデザイナーとして仕事をしています。主にドラマの美術を担当しています。いままで多くのドラマの

仕事をやってきました。ドラマ、特に時代劇では、大道具、小道具、衣装のそれぞれの分野のプロがいて成立します。そのプロの仕事の質の高さがあつた上でのオリジナルです。しかし、これまで評価されることが少なかったため、この賞は現場スタッフの大きな励みになります。

時代劇の美術の伝統は絶やしてはいけないと思っています。これからも頑張ります。

特別賞 小林克也氏（個人）

《表彰状》1970年にDJデビューして以来、48年にわたりラジオ界、テレビ界の第一線を走り続け、喜寿を迎えた現在も約9時間の生放送『FUNKY FRIDAY』（NACK5）を始め7本の番組を持つという

しゃいます。まさにKING OF DJとして、放送業界に多大な貢献をした功績を称え特別賞を贈ります。

【講師】三原治委員



おめでとうございます。放送に関わる者として、お会いできて感謝無量です。3月27日に喜寿を迎えられたとのこと、こちらもおめでとうございます。

時間の生放送「ファンキーフライデー」は93年からもう25年続いている長寿番組です。人を惹きつける小林さんの存在感とトーク力のラジオの魅力満載の番組を続けておられます。小林さんは広島県福山市の生まれ、中学、高校のとき岩国の米軍放送FENの音楽番組を聞いてディスコジョッキーに憧れた。大学は慶應で、卒業後は洋楽の知識と英語力を活かして外国人の観光ガイド、ナイトクラブの司会などをやった。デビューは意外に遅く1970年にラジオ関東からDJとしてデビュー。それ以降は各局からDJとして引つ張りだ。特に伝説の番組「スネークマンショー」が爆発的な人気でした。

このたび、喜寿を記念して、小林さん率いる「ナンバーワンバンド」が25年ぶりにオリジナルアルバム「鯛く最後の晩餐」を3月21

日に発売しました。タイトルは目出たいの「鯛」とこれが最期との思いがこめられているようですが、まだまだやめないでください。2006年には胃がん、その6年後には前立腺がんだったそうですが、全然お元気で引退はまだずっと先のことだと思います。

人生100年時代と言われます。そんなライフシフトを实践一されているのが小林さんです。

放送関係者はみんな小林さんに憧れていますが、これからも活躍をお願いします。

【受賞者の言葉】



どうもありがとうございます。小林です。いろんなことをやっている感じがありますが、僕は中途半端な人間で、何をやることも満足しない。ラジオには話術が必要なのですが、自分自身のランクでいうと話術は5くらいです。洋楽を紹介する「ベストヒットUSA」というテレビ番組に引つ張り出されたとき、それを見ていた石井聰互という映画監督に「逆噴射家族」という映画の主演をやらされました。CDは数えたことがないので、DJ、コメディ、音楽など30枚以上出しています。どれも十分ではありません。

今、そこにいらつしやる田中秋夫さんにはNACK5ができて2年目くらいに呼ばれて、「いろいろ変えたいんだ」と番組表を広げ、

「まあ新しい畑のようなもので、金曜日のここらをちよつと耕してもらえないか」と言われました。それが8時間です。僕は薬にできる方法はないか、ハワイのDJなどをやっている連中に8時間をやらせて、僕は途中ちよこちよこつと喋るのはどうかと考えた。

金曜の番組ですから、土曜、日曜に向かってレジャー観、海外のインターナショナルな感覚などを入れてスタートした。スタートしてすぐバブルがはじけて、田中さんから電話がありました。「小林くん、悪いけど制作費が2分の1になった。そして8時間を9時間にする」。それまで楽をしていて、プロデューサーとしてDJなどとの間に入って手にしていたお金も半減です。「じゃ、僕がスタジオに行つて生放送を」ということになりました。それから20数年たちます。

僕には本格的にDJをやったり、深夜放送のパーソナリティーをやったりする力がありません。頭の中にはラジオを聴いてきた世界があります。これまでやってきた役者、ミュージシャンとしての感覚で、喋りはうまくないのですが、映像感、スペース感みたいなものがあつて、いつも上手、下手を意識して、音楽はこちらの方からこのくらいのボリュームで聞こえてくる、といった、小さなことに気がついていきます。皆さんにあつちこつち引っ張りまわされているうちにいろんな能力がつかえました。

ラジオの制作の人数はく少なく、だいたい2、3人です。しかし、ハワイアンを流して「Z、Z、Z」といびきが聞こえると、ハワイの楽園で昼寝をしているイメージが頭の中にある。画を作ろうとすると1000人以

上のスタッフが要ることがラジオでは簡単にできる。頭の使いようでは卑怯だったり、セコかったりするメディアでもあります。頭の中に心の中に劇場を作ることができる素晴らしいメディアです。

いまラジオはインターネットのラジオがあり、音楽ではスクリーニングといつて定額を払うと好みの音楽が24時間流れてくる。

アップルが数年前、どんなものを聞きたいかの調査をしたことがある。答えて一番多かったのは「ラジオ」です。生の人間がそこにいることを確認できるのはラジオしかないからだときかれました。がっくりすることはないので、車がある限りラジオはある。ラジオだけにはしがみついています。

僕も77歳になりました。人生だんだん日暮れで、夕方になると落ち込みます。一晩休んで朝になるとちよつと元気になっているという毎日を送っています。

先ほど「最後の晩餐」のことがでしたが、今日が最期かもしれないという感覚は毎日持っています。

長くなりました。喋らせるとあと1時間くらい喋りますのでこれくらいでやめます。

賞ですが、僕は小学校4年生のとき写生大会で金賞をもらつて以来です。写生大会の賞状は貰っていません。

本日はありがとうございました。

進グランプリ

「オールナイトニッポン50周年」

〈表彰状〉1967年のスタートから50年、深夜放送が若者文化を生んだ金字塔。この番組が蒔いた新しい才能の種は、多くの分野で

花開き、若者文化のみならず、日本の新たなカルチャーを作りました。歴代制作者のそれぞれのフロンティア精神と先見性は卓越しており、ラジオ文化の発展に寄与してきていることを称え表彰いたします。

【講評】三原治委員

おめでとございます。ラジオの進グランプリは初めてです。今回ラジオから小林克也さんと2つ入っています。

この講評の担当は松山委員だったので、私が代理をつとめます。

「オールナイトニッポン」にはテーマソングがあります。「君が踊り、僕が歌う。新しい時代の夜が生まれる。」これは各世代の青春が甦ってくる歌です。僕も中学の頃から聞いていて、その時代は吉田拓郎でした。番組スタートから50年、賞状の中にあるようにカルチャーを作つたというのは勿論ですが、有名な人を連れてきてやらせるのではなく、無名人を多く起用して、その人が有名になつていきます。タモリさん、所ジョージさん、稲川淳二さんなどがそうです。今でも誰もが知らない人にパーソナリティーをやらせています。それが「オールナイトニッポン」らしいところです。

かつてはラジオで発掘した才能をテレビで使うことが多かったのですが、いまはテレビで活躍した人をラジオに連れてくる。まあこれはいいとして、「オールナイトニッポン」が始まつた1967年は団塊の世代が二十歳、ちょうど青春時代で、その人たちが聞いてくれたことでブームに火がついた。その10年あとが僕らの世代です。テレビに押されてラジ

オが衰退していたころ、「オールナイトニッポン」など深夜放送が出て、ラジオ界の神風になりました。ラジオは深夜放送という文化を生み出しました。若者たちを巻き込むのはいまはSNSでしょうか。

記憶を辿ると60年代は糸居五郎さん、亀淵昭信さんなど局アナがDJを担当して、深夜の解放区というキーワードが生まれました。70年代、80年代は吉田拓郎、中島みゆきなどニューミュージックの方たち、そしてビートルたけし、タモリなど名だたる人たちが加わつて、その中で新陳代謝しながら変わつていった。いまも話題の星野源さんがやっています。いまも「オールナイトニッポン」は若者の注目を集めている。この番組の継続はパーソナリティー、制作者の演出力など、いろんな力の結集です。

いまラジオに一番必要なことは若者に向けて番組を作ることです。いまの若者はラジオもラジカセも持っていない。ラジオという言葉も知らないかもしれない。周波数を合わせると何？と首をかしげる。しかしスマートフォンでラジオが聞ける。ラジオというアプリです。ここにきてラジオは少し復調しているようです。ラジオの最後の砦は若者です。ティーンズ番組を作る制作者には頭が下がります。そのチャレンジは無駄ではないし、重要な意味を持っています。ティーンズにラジオの良さを知らせなくてはラジオの未来はありません。将来のリスナー開拓、これは必須です。そのために「オールナイトニッポン」のようにいろんな発想や企画を持つて、若者にとつて面白い興味深い番組を作つてくださ

【受賞者の言葉】 富山雄一氏



「オールナイトニッポン」でプロデューサーをつとめているニッポン放送の富山です。

この度は大変名誉ある賞をいただき本当にありがとうございます。

この度の受賞はこれまでの数百人のパーソナリティー、何千人のディレクター、作家、ミキサー、営業マン、スタッフでいただいた賞だと思っています。

特別賞を受賞なさった小林克也さんは1973年から「オールナイトニッポン」で喋っていたので、いまでも土曜日の朝、ニッポン放送で喋っていたでいます。

私は36歳で、「オールナイトニッポン」を初めて聞いたのは中学2年生、13、14歳のころ、1994年、それからリスナーとして23年聞いています。ニッポン放送には2007年に入りましたので、11年局員として関わっています。

かつて、今は亡き先輩ディレクターに「オールナイトニッポンは変化をおそれない。それがオールナイトニッポンのDNAだ」と教わりました。局アナで始まり、タレントがDJになり、その都度時代に合わせていろいろ取り組んできた50年です。

東日本大震災が起こったとき、このディレ

クターとそのとき東北で頑張っていたサウンドイッチマンさんに前日に依頼して、喋ってもらいました。ドタバタだったのですが、東北の局は緊急放送を1回やめてサウンドイッチマンの放送をとってくれました。1カ月後には当時オールナイトニッポンをやっていた福山雅治さんが24時間のチャリティーをやりたいというのでやりました。リスナーに何を届けるかと懸命に考えると放送になるのだと強く感じる体験でした。

2007年、私が入社したときのニッポン放送はAMだけ、都内では電波が入りにくくインターネットもWEBの掲示板やブログなどで、ラジオにとっていい環境ではありませんでした。2010年、ラジオで聞けるようになるようになりました。そしてラジオのアプリがスマホに入ってラジオを聞く層が広がりました。今の10代20代はラジオを全く知らず、局に届くメールを見ると「ラジオ番組」といっています。ラジオという概念はなくアプリでクリックすると聞ける楽しい番組と考えている。いまはタイムフリーという1週間いつでも聞ける仕組みがあるので、深夜放送ではなく、通勤通学の時間に聞く人が多くいらいに聞き方は変わっています。

今は20代のディレクターがメインで試行錯誤しながらやっています。中身自体はあまり変わってなくて、パーソナリティーが全国のリリスナーに呼び掛けて、それに対する反応で一緒に時間を過ごす形です。かつてはハガキ、それからFAXになり、僕の時代がメール、今はSNSですが、日本全国で一つのコミュニティにつながっているというのは

番組が始まったときから変わっていないのだと思います。

その点を大事にして、今回は50周年で進グランプリをいただきましたが、次は100周年でグランプリをいただきたいと思っています。本日はありがとうございます。

◆グランプリ◆

NHKスペシャル

「戦慄の記録 インパール」

「本土空襲 全記録」

「731部隊の真実」エリート医学者と人体実験」

「樺太地上戦 終戦後7日間の悲劇」



〈表彰状〉

「戦争を知らない子供たち」世代の年長者は今年74歳になる。この世代にと

っても、連続4夜のNHKスペシャルの衝撃は大きかったに違いない。空から石油をまいて火をつけたように都市が焼かれた『本土空襲 全記録』、中国人を人体実験に供した『731部隊の真実』、樺太にソ連軍が侵攻する『樺太地上戦 終戦7日間の悲劇』そして白骨街道インパールの惨劇『戦慄の記録 インパール』は、戦争の無残さを存分に伝えました。その編成・制作陣の洞察力と熱意を讃えて表彰いたします。

【講評】 藤久ミネ委員

先ほど説明がありましたが、いつも下馬評座談会をやってから選考をしています。その下馬評のとき、私と鈴木典之さんが、今まで複数本グランプリを差し上げたことはないが、是非4本に差し上げたいと強く申し上げました。というのは、私と鈴木さんは同じ歳で、小学校というところに行っておりません。入学するとき国民学校になり、少国民と呼ばれ、卒業したら、学校は小学校に戻りました。小学校に行っていないと、外国にいったのか？と言われますが、そんな学校制度と戦時中の学童疎開を体験した昭和9年生まれです。



「戦争を知らない子供たち」という歌が流れたとき、私は憤慨して、体験はしてみな

いとわからないことはあるが、歴史的な事実を体験として受け止める理性がなければ体験は生きないと、強く思いました。そんな意味で、この番組全体は、いま、戦争を知らないで、日本のいい加減な空気の社会に生きている人たちに、何らかの刺激、教訓を与えてくだったもので、大変感謝しております。

私は「本土空襲」と「731部隊」について話し、鈴木さんが、「インパール」と「樺太地上戦」について話すことになっています。

表彰状に「空から石油をまいて火をつけたように」とあるのは実にいいコメントだと思います。国民学校のとき集団疎開で、日吉から4キロのところへ疎開しました。学校を海軍が接収して生徒をどかしたのです。敗戦の年の4月15日、物凄い空襲にありました。夜じゅう、生き埋めになるかと脅えながら朝までまんじりともせず、明け方、炊き出しをする農家の人からおむすびを1個貰ったのですが、歯の根があわない。恐怖で顎がぐくぐくして噛めないのです。住んでいたところは焼けたので、先生の家に連れて行かれましたが、途中見た学校の校庭には焼夷弾が針の山のよう

に隙間なく突き刺さっていました。

「本土空襲全記録」を見て、「ああ、この通りだ」と記憶がしみじみと甦ってきました。

「731部隊」については遠藤周作が「海と毒薬」で九州大学の生体実験を書いています。すが、そのなかで「日本人には神がない。神という倫理、道徳を持たない」と書いています。「731部隊の真実」をみて、そのことの意味がよくわかりました。

日本人は自分が体験したことは覚えていますが、その体験を継承する願慮が足りない。加

藤周一は「戦争は国民的記憶だ」とのガルブレイスの言葉を紹介していますが、自分が体験していなくても体験したのと同じように考えるのが国民的記憶ということだと思います。そんな感性を養うのに今回の作品は強い力を發揮してくれたと思います。感激しました。ありがとございます。

【講師】鈴木典之委員



藤久さんと同じ戦中世代です。

この世代はどれも戦争反対の意識を植え付けられています。戦後何年と数えながら、戦争に関する意識を作ってきた柱の一つが放送であり、戦争特番だったと思います。それが下火になったところから妙な戦前返り、あるいは新しい戦前の雰囲気が出た中に目立ち始めた。これはおかしいんじゃないかというのがわれわれ世代の実感です。

70年たつてやつと定番と言える事実が出てきた。個々の作品は実に力作です。よくぞこんな新資料を集めた。証言を集め、外国の資料を見つければ、歴史眼がなければ、執念がなければこれだけのものではないと痛感しました。それが次の世代に残す正確な戦争の記録です。これはわれわれの共通の財産にしなければいけない。皆さんよくぞ作ってくださいと感謝します。

「樺太地上戦」は7日間の無駄な戦争です。

前線の司令官が独断で「樺太を死守せよ」と命令し、現地の部隊はこれに抵抗できず、港で日本本土への帰還を待っていた人たちが戦争に巻き込まれたのです。中国大陸からの帰還と同じ状況です。番組は見逃さされてきた意外で重要な新資料を元に緻密に、現場体験的に示しています。素晴らしい構成力です。電話局の若い女性交換手の全員集団自決のエピソードも哀切で、避難民の地獄絵図と共に軍独走の暴挙をまざまざと実感させます。

「インパール」は牟田口司令官付きの斎藤少尉が作戦の実態を克明に書き綴った日記が柱になっています。今まで何故これが出てこなかったのかと思うくらい凄惨な記録です。その少尉が奇跡的に生還して、96歳、車椅子で画面の奥から現れて、「日本のいくさは兵士を無駄に虫けらのように殺した」と慟哭する。このラストシーンは4本の作品を象徴するもので、戦争の本質と日本の指導部の無責任体制を象徴的に表現しています。

4作品と一緒に表彰したことについて話します。4作品のそれぞれが優れていたことは勿論ですが、8月12日から15日まで4日間続けて放送して強い効果を出したNHKの積極的な姿勢を評価します。戦後70年に及ぶ毎年の「戦争特番」継続の努力は、記憶の風化が危ぶまれる中、貴重な記憶遺産を残しました。自覚的な制作陣の労苦と執念にエールを送ります。

「インパール」は8月15日、Nスペでやった後、12月10日、40分長くした決定版を放送、それをNHKの総合、教育、BS1、BSプレミアムとすべてのチャンネルで再放送しています。これは異例なことで、何故こ

までやったのかNHKの方教えてください。

平成は来年で終わりますが、中途半端な揺らいだ時代、付度が跋扈する萎縮した時代の次はどうなるのだろうかと不安でいました。通信との共存で、言論と報道の放送のリーダーシップも問われている事態です。

この4作品はそれに応え、具体的な一つの道標の役割を果たすものだと思います。放送はまだまだ捨てたものじゃない、とわかったことがとても嬉しいとお伝えして、講師を終わります。

【受賞者の言葉】横井秀信氏

（戦慄の記録 インパール）担当

この度はありがとうございます。さきほど藤久さんと鈴木さんから昭和9年生まれと聞きましたが、私の父親も昭和9年で、戦争が大嫌いです。子どものころ「ばだしのゲン」を読まされ、夢にまで出てきて、戦争への嫌



悪感を強く持つて育ちました。番組を作るようになって多くの戦争体験者の話を伺い、子どものころの体験とシンクロするようになり、いろんな人から受け継いだものを放送を通じて伝えることにやりがいを見出しました。この番組で受賞して本当に嬉しく思います。

「インパール」の番組が初回放送版 完全

版と何度も放送されましたが、これは最初は不純な動機でした。予算を壊くオーバーして、番組をたくさん作って予算を貰わないといけないだったんです。やっているうちにいろんな方から再放送のご要望をたくさんいただきました。若い人はツイッターで、「自分の周りのインパール、日本的な無責任体質はいっぱい残っている」と語り合っていました。そんなことで何回も放送することができました。

取材を受けてくださった方はみんな90歳を越えた方で、なかには100歳以上の方もありました。そのなかで番組放送後4名の方が鬼籍に入っております。われわれの取材を最後の遺言として残してくださいとお願いして、重い責任を感じています。

私は戦後生まれですが、「戦中派であれ」と言ってきた方があります。その思いを受け継いでこれから頑張ってくださいと思います。

【受賞者の言葉】 城 光一氏
(本土空襲 全記録 担当)



ありがとうございます。放送人グランプリをいただいたのが何よりも嬉しく、先輩の方に「よくやった」と褒められた気がします。

2011年、震災の年、私は大阪にいて障碍者バラエティーの番組で放送人グランプリ奨励賞をいただきました。そのときは「精進

します」とご挨拶しましたが、7年後この賞をいただき感謝無量です。

現在私は宮崎の局にいます。小さな放送局でディレクターが6人しかいません。宮崎でしか放送しないニュースや、25分番組をぶだんはやっています。東京から宮崎へ転任したのが3年前で、まず宮崎の空襲をテーマにした4分ほどのニュース企画を制作しました。宮崎県のいろんなところが空襲されています。

B29による焼夷弾攻撃はよく知られていますが、戦闘機からの機銃掃射でかなりの死傷者があり、いまだにその弾の傷を抱えているひともあります。その範囲をひろげて25分番組に展開し、さらに広げて九州沖縄を作り、さらに他の地区を加えて「目撃 日本列島」を放送しました。それから2年間粘り強く取材を続け、ようやくNHKスペシャルの企画が通りました。

宮崎は小さな局で膨大な戦争のデータを1局でまとめる力がありません。隣の鹿児島県は宮崎以上に空襲の被害を受けているので、この鹿児島放送局と協力し、さらに東京のNHKスペシャル・大型企画開発センターのディレクターにも入ってもらい、この番組になりました。もとは4分ほどの1枚のニュース企画から始まったものがここまで大きくなりました。小さな企画書の中にどれだけの可能性があるか、これからの目をこらしていこうとおもいます。

【受賞者の言葉】 右田千代氏
(「731部隊の真実 エリート医学者と人体実験」担当)

放送人の会の賞を頂くのは他の賞と比べて特別な思いがあります。戦争については先輩が

たが怒りと優しさのあふれた番組を歴代作



つてきて下さった後に私たちはいます。先輩たちの灯を絶やすまいと毎年夏に目掛けて提案し、制作し続けています。しかし夏の終戦特集はだんだん視聴率がとれなくなってきた。モニター報告を読むと「もう見飽きた」「同じことの繰り返しだ」との感想があります。

私たちの世代は戦争の体験はありませんが戦争体験者から直接話を聞くことができた世代です。その責任を強く感じています。

今回も最初は全く白紙の状態から始まっています。これまでくるしまぎれにアメリカの公文書館の資料から材料を探し出したことがありましたが、今回NHKのアーカイブスにいる人がソ連に眠った資料がいっぱいあると教えてくれ、使えそうだとおもいました。そこに岡田 朋彦が、科学の専門家ですが「731部隊はソ連、ハバロフスクですね」と言い、さらにソ連の専門家の田中雄一が写真をみてマイクがあるから録音があるはずだと、ハバロフスクのアーカイブスの人に聞くとテープが出てきました。これまで一度も聞いていないテープです。

人体実験についてはこれまでいろんなルポがありますが、これまで誰も辿りつけなかった書類が京大の膨大な資料の中から見つかりました。また、長野で少年兵だった人の証言

がえられました。つらい記憶で話したくないと拒んでおられたのですが、たまたま心がほぐれて、自分も90歳になるし、と話していただけでした。そんなことがたくさん積み重なって、あきらめてはいけないのだと教えられました。私たちが心していたのは、過去を糾弾するのでなく、自分の問題として受け止めることです。エリート医学者をタイトルに入れたのもそんな意味です。日本学術会議が防衛省からのお金を貰って研究をするのかと議論したのはちょうど番組の放送と重なる時期でした。私たちはこれを一つのテーマにしないでいいのかながえました。番組を構成して行くと、今の出来事は入りにくく、削ろうかとも思ったのですが、ぎくしゃくしてもやはり私たちは自分たちの問題としてこれを出すのだと考え、日本学術会議の動きも番組の中に入れました。

継承してきたことでは、放送人グランプリでも受賞したNNNDキュメントの南京事件をみて私たちは励まされました。資料があれば今でも伝えることはできるので励まされて、最後まで行き着くことができました。

今後、戦争のない時代を私たちが受け継いで行けるよう、企画を出し続けたいと思います。

【受賞者の言葉】 天川恵美子氏
(「樺太地上戦 7日間の悲劇」担当)

このような重い賞をいただきありがとうございます。

「樺太地上戦」は制作の過程でも苦労の多い番組でした。4本のなかで唯一午後8時台の放送で、放送時間も43分と他とくらべると



短い。私は昨年まで札幌放送局にいて、メインのディレクターは札幌放送局の37歳、そして釧路局の24歳、入局2年目のディレクターが中心となって北海道じゅう、そして全国を走り回って証言を集めて番組をつくりました。もう一人、福岡放送局の40歳のディレクターにも入ってもらい、20代、30代、40代、50代の人間がそろっています。

私は3年前札幌に転任し、最初に行ったのが赤煉瓦の北海道庁舎です。あの中に北海道の歴史がだーっと展示されています。そこには北方領土、アイヌ、開拓の歴史などいろいろありますが、たくさん展示の隅っこに1枚だけ樺太の戦争のパネルがありました。そこに郵便局の女性が青酸カリで集団自殺したこと、戦闘が22日まで続いたと短い説明がありました。私は沖縄の放送局にいたことがあり、日本で唯一の地上戦といっていくつか番組を作ったので、樺太の戦闘を知り、いかに歴史を知らなかったかを感じ、これで番組を作ろうと決心しました。最初はロシアアーカイブスのプロジェクトという大きな形で動き出し、私たちも樺太地上戦の映像があると思って制作を始めたのですが、最終的にその映像はロシアのアーカイブスから出してもらえませんでした。一時は放送をやめるかと考えたのですが、その間20代、30代のディ

レクターが全国を走り回って樺太戦の体験を集めてきました。この証言は映像がないからといって伝えないわけにはいかない。なんとか伝えたいと思いました。証言を聞きに行く、と樺太の体験者は「よく来たね」と迎えていただきました。戦争の体験は話したがらない人が多いのですが、北海道でも樺太のことが報じられることが少なく、いままで話したことがなかったという方が大勢おられました。それを伝えられれば私たちは本望だと、制作をしました。

今の日本人の多くは樺太がかつて日本の領土だったことを知りません。そこでCGを使ったりわかりやすく作ろうと努力しました。

何とか放送にこぎつけて、4本の中の1本に加わってよかったなあと思います。

今年もNHKは夏の特集をやるつもりです。どうかご支援をお願いします。



放送人グランプリ 2018(第17回)投票番組&人の一覧 (ジャンル別・放送順・敬称略)

◆グランプリ 2018の候補

☆ドキュメンタリー

NHKスペシャル・四夜連続

「本土空襲 全記録」(8/12、夜9時、49分)、「731部隊の真実〜エリート医学者と人体実験」(8/13、夜7時30分、73分)、「樺太地上戦 終戦後7日間の記録」(8/14、夜8時、43分)、「戦慄の記録 インパール」(8/15、夜7時30分、73分)

メーテレドキュメント「防衛フェリー〜民間船と戦争〜」(11/19、朝4時35分〜、55分版、P：村瀬史憲、D：依田恵美子、制作：メーテレ(名古屋テレビ)、※第37回「地方の時代」映像祭2017放送局部門・優秀賞受賞、平成29年度文化庁芸術祭テレビドキュメンタリー部門・大賞受賞。)

NHKEテレ・ETV特集「砂川事件・60年後の問いかけ」(12/16、夜11時、60分)

金平茂紀と報道特集を支える人々(TBSテレビ、毎日曜・夜6時〜)

広瀬京二(ホームルーム代表、NHKWorld「Kids Meet the World」、NHKG「あの人に会いたい」)

中村直文(NHKプロデューサー、「クローズアップ現代+」、Nスペ・未解決事件シリーズ「オウム真理教」「赤報隊事件」など)

今 理織(こん みちおり、NHK文化福祉番組・ディレクター、Nスペ「スクープドキュメント 沖縄と核」9/10、夜9時など、※2013年〜2017年夏・沖縄放送局制作部)

☆ドラマ

ビデオマーケットによる「HBC(北海道放送)ドラマ傑作選」の動画配信

NHKG「この声をきみに」(9/15〜金曜夜10時〜、全8回、脚本：大森美香、D：笠浦友愛(ほか))

TBSテレビ「陸王」(10/15〜日曜夜9時〜、全10回、原作：池井戸潤、脚本：八津弘幸、D：福澤克雄(ほか))

WOWOW「石つぶて〜外務省機密費を暴いた捜査二課の男たち」(11/5、日曜夜10時〜、全8回、原作：清武英利、脚本：戸田山雅司、P：岡野真紀子、永井麗子、制作極力：共同テレビ)

坂元裕二（脚本家、最近作「anone」「カルテット」「問題のあるレストラン」「モザイクジャパン」）
野木亜紀子（脚本家、最近作「アンナチャール」「逃げるは恥だが役に立つ」「重版出来！」）
加藤拓（NHK演出、特集ドラマ「眩～北斎の娘」）

☆バラエティー

TX「緊急SOS！池の水ぜんぶ抜く大作戦」（不定期・日曜ビックバラエティ、2018年4月より月1回）
マツコデラックス（コラムニスト、エッセイスト、タレント・司会者、自称「女装癖のゲイ」）

☆ラジオ

ニッポン放送「オールナイトニッポン」50周年
TBSラジオ・BS-TBS「吉田照美のてれジオ倶楽部」（6月～9月の月1回・30分）
TBSラジオ・RKB毎日放送共同ドキュメンタリー企画「SCRATCH 線を引く人」（12/29、夜8時47分、60分、出演：神戸金史（RKB毎日放送 記者）、奥田知志（東八幡キリスト教会牧師）、保坂展人（世田谷区長）ほか）
CBCラジオのラジオ放送局としての健闘に
小林克也（フリー）
森 理恵子（テラ・プロジェクトのディレクター、CBCラジオ「1/6の群像」平成29年日本民間放送連盟賞教養部門・最優秀賞受賞）

◆特別賞

日露共同制作・BTV開局20周年記念「ゴンザ～世界最初の露日辞典を作った男～」（BTV制作）
NHKEテレ「バリバラ」（NHK大阪局制作）
BPO・放送倫理・番組向上機構の活動に対して（2003年設立）
企画賞として久米宏著「久米宏です。ニュースステーションはザ・ベストテンだった」の出版

市村 元（2007年より「地方の時代映像祭」のプロデューサーとして活躍。TBS報道局を経て、元関西大学客員教授）
辛 淑玉（しん すご、のりこえネット共同代表、東京MXテレビ「ニュース女子」の報道被害者）
早坂 暁（脚本家、2017年12月16日物故。享年88。NHK「天下御免」「夢千代日記」「花へんろ」）
大杉 漣（俳優、2018年2月21日急逝。転形劇場を経て、映画テレビドラマ・バラエティーで活躍）

◆準グランプリ

NHKスペシャル「未解決事件 File.06 赤報隊事件」（全2回。1/27・夜7時30分、実録ドラマ73分、脚本：田子明弘、D：谷川功、P：中村直文ほか、美術：稲葉寿一、1/28・夜9時、ドキュメンタリー49分）
テレビ朝日・東映「科捜研の女」シリーズ（1999年10月より、19年間で17シリーズ）

◆優秀賞・奨励賞など

☆ドキュメンタリー

NHKBSプレミアム「昭和の選択 “核なき世界” と権力への挑戦～いま石橋湛山を見る～」（4/29、昼1時30分～、60分。※2016年8月25日夜8時放送の再放送。司会：磯田道史、渡邊佐和子、出演：増田弘、船橋洋一、宮崎哲弥、高橋源一郎）
山形放送・NNNドキュメント「わたしは、LGBT」（6/11、24：55～、30分）
NHKEテレ「原爆と沈黙～長崎浦上の受難～」（8/12、夜11時、59分、D：渡辺孝、P：山中賢一、塩田純、制作：NHK長崎）
NHKBS1「父を探して～日系オランダ人 終わらない戦争」（10/8、夜10時、110分、D：金本麻理子）
NNNドキュメント「記憶の澱」（12/3、深夜01時5分～、55分、D：佐々木聡、P：渡辺雅史、制作：山口放送）
NHKスペシャル「激変する世界ビジネス “脱炭素革命” の衝撃」（12/17、夜9時15分～、49分）
NHKBS1「いのち爆買い～米中・加熱する不妊ビジネス～」（12/24、深夜0時、50分、P：嘉悦登ほか、D：四宮秀二、制作：パオネットワーク）
NHKG「事件の涙『死刑囚の母息子の選択～和歌山毒物カレー事件』」（12/26、夜10時50分、25分、P：松本卓臣、D：森田智子）
石牟礼道子の追悼番組・ETV特集「花を奉る 石牟礼道子の世界」の再放送（2/18、深夜25時15分～、90分、NHKEテレ、※2012年放送の再放送）

金本麻理子

(椿プロ・代表取締役 ディレクター・プロデューサー、NHK・BS1 スペシャル「父を捜して～日系オランダ人 終わらない戦争～」
「偽りの結婚～追いつめられるシリア難民女性～」 「シリアを遠く離れて ～アンマール少年と家族の5年～」 など)

加藤就一

(日本テレビ・ディレクター、NNNドキュメント・原発関連「2つの“マル秘”と再稼働～国はなぜ原発事故試算を隠したのか？」
2015年8/23、「お笑い芸人 vs. 原発事故～マコ&ケン原発取材2000日～」 2017年2/15、深夜25時55分、55分、「放射能とトモダチ作戦」 2017年10/14、深夜25時、55分、ほか)

伊藤 純 (NHKエンタープライズ・プロデューサー、「新日本風土記」 「京都人の密かな愉しみ」)

塩田 純 (NHK第1制作センター文化・福祉番組部プロデューサー、「原爆と沈黙～長崎浦上の受難～」)

☆ドラマ

NHK「眩(くらら)～北斎の娘」

(9/18、73分、原作：朝井かまて、脚本：大森美香、D：加藤拓、P：佐野元彦)

WOWOW「北斗～ある殺人者の回心～」

(3/25、土曜夜10時～、全5回、原作：石田衣良、脚本&D：瀧本智行、P：岡野真紀子、制作協力：東映京都撮影所)

CX「民衆の敵」(10/23～、55分×全10回、脚本：黒沢久子ほか、D：金井紘、P：草ヶ谷大輔)

LGBT関連のドラマたち～NHKG「女子の生活」(1/5～、全4回、制作：NHK大阪)、NHKBS「弟の夫」(3/4～、全3回、制作：ザロック&NEP)、CX「隣の家族は青く見える」(1/18、全10回)

黒沢 淳 (テレパック・ドラマプロデューサー、WOWOW「片思い」「社長室の冬」、TX「模倣犯」)

荒井修子 (脚本家、NHK「ツバキ文具店～鎌倉代書屋物語」「水族館ガール」)

EX「やすらぎの郷」制作者たち

(4/3～9/29、月～金・昼12時30分、20分×129回、D：藤田明二、阿部雄一、池添博、唐木希浩、P：中込卓也・服部宣之 (EX)、河角直樹 (国際放映) CP：五十嵐文郎 (EX))

宮崎あおい (女優、「眩～北斎の娘～」お栄の演技)

☆バラエティー

NHKBS「COOL JAPAN～発掘! かつこいニッポン～」(毎日曜、夜6時～、50分)

日本テレビ「のどじまん THE ワールド! 2018年春」(3/10、夜7時～、2時間54分)

伊藤隆行

(テレビ東京・プロデューサー、「モヤモヤさまぁ～ず2」「池の水ぜんぶ抜く大作戦」「にちようチャップリン」「さますポ」「おしゃべりオジサンとヤバイ女」「やりすぎ都市伝説」など)

日比野和雄 (NHKプロデューサー、NHK大阪制作・Eテレ「バリバラ～障害者情報バラエティー～」)

☆ラジオ

高嶋秀武 (アナウンサー、元ニッポン放送、18年3/30で「高嶋ひでたけのあさラジ!」が終了。76歳)

依田恵美子 (名古屋テレビ・ディレクター、「防衛フェリー～民間船と戦争～」)

神戸金史 (RKB毎日放送・記者、「SCRATCH 線を引く人」の企画取材出演)

◇大山勝美賞の候補

是枝裕和 (テレビマンユニオンを経て、フリーの映画監督・テレビディレクター)

加藤 拓 (NHK・ドラマディレクター、「眩～北斎の娘」「精霊の守り人」「八重の桜」)

内山聖子 (テレビ朝日・ドラマプロデューサー、「ドクターX 外科医・大門未知子」「交渉人」「BG～身辺警護人～」)

浅野敦也

(ドリマックス・ドラマプロデューサー、TX「バイプレイヤーズ～もしも名脇役がシェアハウスで暮らしたら～」、BSジャパン「ブリズンホテル」、MBS「伊藤くん AtoE」、TX「破獄」)

樋山裕子 (日本テレビ・ドラマプロデューサー、NTV「もみ消して冬」「母になる」)

小田玲奈

(日本テレビ・ドラマプロデューサー、80年生まれ。「家売るオンナ」「地味にスゴイ! 校閲ガール・河野悦子」「ウチの夫は仕事ができない」)



懇親会 スタッフ



2018年度放送人の会総会

2018年度の放送人の会総会、第5期社員総会は5月19日(土)、午後1時から、千代田区紀尾井町、千代田放送会館2階ホールで開催された。社員総数250のうち出席162(うち委任状133)で成立。西川章監事から会の運営は適正であるとの監査報告を受け、事業報告、2017年度決算、2018年度予算、運営体制を承認した。予算、決算の対比は左記の表の通り。

事業報告の概要は以下の通り。
1、「第17回」日韓中テレビ制作者フォーラム「東京大会」
作品テーマ「田舎暮らしと都市と地方の問題を考える」。日韓中の制作者やメディア研究者が活発な意見交換を行った。共催・上智大学メディアジャーナリズム研究所。
*2018年度は韓国大会(光州市)を予定。
2、放送人グランプリ
第16回放送人グランプリ各賞および大山

勝美賞の贈賞。
3、名作の舞台裏
NHK時代劇「陽炎の辻」、ドラマ人間模様「太陽の子」などのふあー
4、人気番組メモリー
「世界ふしぎ発見!」(TBS、制作・テレビマンユニオン)
5、放送人の世界
2017年度は実施せず。2018年度の実施を検討中。

6、放送人の証言
大治浩之輔、河野祐一、飯島敏宏、杉山茂皇達也
7、ドキュメンタリーワールド
「放送人の証言」LIVE人間稼業としてのドキュメンタリーづくり(市岡康子、大治浩之輔)
8、放送人句会
会員交流の場として隔月開催。作品は会報に掲載。兼題に放送業界用語が出る。
9、ラジオプロジェクト
「ラジオ聞き酒の会」を5回実施。「ボブ・ディランノーベル文学賞受賞記念特番」時代は変わる(FM東京)など話題の番組を聴き、ラジオ界の情報交換を行った。
10、広報
会報を3回発行。ホームページはタイムリに更新し、活性化を図っている。フェイスブックはイベントの告知を中心に適宜アップ。
11、総務
会の活動全般を把握し、運営の円滑化に勤めている。老朽化したパソコンを更新するなど、事務局体制を整備した。

2017年度・18年度予算収支対比

科目	2017年度予算	実績	2018年度予算
1、経常増減の部			
(1)経常収益			
①受取年会	2,500,000	2,695,000	2,550,000
②受取寄付金	7,123,430	7,440,661	3,269,430
受取寄付金	150,000	158,000	150,000
(大山基金)振替額			
グランプリ+日韓中	5,750,000	5,587,561	1,450,000
一般管理費30%振替	1,223,430	876,996	1,169,430
一般管理費給与B分		699,110	500,000
PC分		118,994	
③事業収入	17,630,000	17,052,157	2,680,000
放送番組センター共同事業費	1,800,000	1,800,000	1,800,000
イベント収入	180,000	172,000	180,000
放送文化基金助成(「証言」)	650,000	650,000	700,000
日韓中フォーラム助成関係	15,000,000	14,430,082	
④受取利息		75	
経常収益計	27,253,430	27,187,818	8,499,430
(2)経常費用			
①事業費	22,690,000	21,634,435	3,500,000
名作の舞台裏	600,000	603,643	600,000
人気番組メモリー	300,000	128,000	300,000
放送人の世界	100,000	0	100,000
ドキュメンタリー・ワールド	50,000	71,822	100,000
放送人の証言	750,000	657,094	800,000
放送人グランプリ(大山口座)	700,000	1,093,215	1,050,000
ラジオ・プロジェクト	50,000	50,000	60,000
放送人句会	90,000	106,233	90,000
日韓中フォーラム(大山口座)	20,000,000	18,924,428	400,000
②一般管理費	4,528,100	5,004,643	4,398,100
給料手当A	1,100,000	1,140,700	1,100,000
給料手当B	500,000	706,240	500,000
諸謝金	75,000	148,500	150,000
事務所賃貸料	863,100	863,100	863,100
通信費	500,000	304,383	300,000
旅費交通費	350,000	510,642	400,000
会議費	180,000	33,040	100,000
印刷費	125,000	290,173	160,000
広告宣伝費(会報作成関係)	220,000	280,331	220,000
事務用品費	50,000	54,480	50,000
消耗品費	25,000	171,688	25,000
交際費	0	0	50,000
支払手数料等	40,000	37,094	40,000
支払報酬	500,000	463,892	440,000
租税公課・雑費	0	400	0
経常費用計	27,218,100	26,639,078	7,898,100
当期経常増減額	35,330	548,740	601,330

運営体制では、役員、理事に変更はなく、変更点をあげると、千葉邦彦氏、深尾隆一氏が総務委員に、千葉邦彦氏は事務局長に、深尾隆一氏は会員交流・放送人句会プロジェクトのチーフにそれぞれ就任、藤田知久氏が放送人グランプリ・プロジェクトのメンバーに、八木康夫氏が大山勝美賞選考委員会のチーフに就任している。

〈放送メディアの構造と制度〉への問い返し……「政治的公平性」について、もう一つのアプローチ

前川英樹

以下は、JNN各局の報道情報担当者有志が発刊している〈Spirits〉150号に寄稿した内容を加筆修正したものである。「規制改革推進会議」が審議してきた放送と通信の融合と法制度に関する議論が意味するものを、少し違った角度から捉えてみようとした。私の従来のテレビに関するいくつかのアプローチを整理するという意味もある。同紙編集者の了解を得て放送人の会会報に掲載することにした（ホームページ「放送人ブログ・スペシャル」にも掲載した）。

〔I〕

〈Spirits〉150号の原稿の依頼があった時に、今は放送に直接かわつていくわけではないし、メディア環境の変化からも遠くなつてしまったので、何を書けばよいのだろうかと思ひあぐねたのだった。しかし、私にとってほとんど最後の仕事と言つていいであろう「竹中恵」から10年余、再び〈通信と放送の融合と法制度〉の議論が話題になつていくこともあつて、何かを書く意味があるかもしれないと思つたのだ。〈Spirits〉創刊号の巻頭原稿を書いたという縁もある。

さて、政治状況の反映だろうか、「規制改革推進会議」の答申に「放送法4条」2項「政治的公平」規定の廃止は

盛り込まれないことになつた。とはいえ、この論点の持つ意味は大きい。放送法と憲法の関係という観点からも、またインフラとコンテンツという今となつてはいささか新鮮味が欠ける問題や「通信の秘密」と「表現の自由」という極めて原則的な論点としても、はたまたNHKと民放という何度も繰り返されてきた関係論としても、「それ」について語ることはできるだろう。何よりも、『政治的公平』規定は必要」と放送事業者が言つた途端に、それを罰則規定として認めるのかという反問があり、政治的にはそのように作用するであろう。狡猾な仕組み、仕掛けである。

〔II〕

メディアにおける言論表現に関する最も基本的な条件は、「虚偽を伝えない」、「他者の人格を傷つけない」そして「タブーを設けない」ことだと、私は思っている。それは、国民の知る権利に応える前提でもある。そうだとすると「政治的公平規定（フェアネスドクトリン）」に拘らなくてもよいのではないか、という考え方もありうる。「政治的公平」規定が必要だと事業者がいうことは、言論機関が自ら規制を求めることになり、それは自己矛盾ではないかともいえる。

しかし、現代社会ではあらゆることは政治から逃れられない。すべては政治的ベクトルの中にある。この問題の議論も真空地帯で行われるものではない。「狡猾な仕組み、仕掛け」といった所以であ

る。

規制緩和論から見れば、放送用周波数も民間が使用すればそれは「経済財」であつて、市場原理に委ねられるべきであり、それを通信と区別する理由はなくしたがつて規制原理も経済原則に委ねられるべし、ということになる。しかし、こうした政策そのものが極めて政治的なのであつて、例えば「政治的公平性」は規制緩和という経済原則から見ても必要であるだけでなく、それを撤廃することとで政権による政策とイデオロギーのための情報機関の〈場〉を放送波に与える仕組みとして機能する。では、反政権にも同様の〈場〉が与えられれば公平ではないかと言えないだろうか。確かに、それこそが「政治的公平」規制撤廃論の論拠である。

〔III〕

あらためて「政治的公平」規定の意味は何か、何故それは必要なのか、そこから考えるしかない。以下、地上波テレビ（現放送法という「特定地上基幹放送」の問題として話を進めたい）。

「放送法4条2項（政治的公平性）問題へのアプローチにおいて重要なのは、この法の理念Ⅱ存在理由を踏まえることである。この4条は理念規定であり、「公平」とは〈権力との距離の明示Ⅱ権力の広報機関の拒否〉ととらえるのがほぼ通説とされている。4条は、1条の放送法の目的を受けて構成されているのであつて、1条2項「放送の不偏不党、真実及び自律を保障すること」によつて、放送

による表現の自由を確保すること」に対応する。

異なる政治的主張については、4条4項で「意見が対立している問題については、できるだけ多くの角度から論点を明らかにすること」とある。この項もまた「政治的公平性」を重層的に構成していると読めるであろう。

そのうえで、1条2項に「自律」とあるのは、4条の各規定は放送事業者が自ら規律するものであるという意味と解することができるのであり、そこに4条が倫理規定とされる根拠があると思われる。私は法の専門家ではないが、その程度の理解はできる。

あえて繰り返せば、「政治的公平性」は放送法の基本概念を構成するのであり、それは放送事業者が自律的に実現すべきなのである。その撤廃は、権力によるメディアへの介入を許容することになる。自分の意見・思考にあつた情報だけ選択する傾向は、ネット社会になつて顕著になつていくが、世界には多様な意見があり、それを認識することこそ多様性と共同性を成立させるために欠かせない。放送における「公平」とは、権力との緊張関係の下での多様性の確保なのである。その意味でも、「政治的公平」は規制というより理念なのである。

言うまでもなく法は社会的拘束力を有するが、その前提として法の理念Ⅱ存在理由がある。放送法はその基本において極めて理念型の、すなわち戦後民主主義における典型的な法であり、憲法理念

がまことに直接的に反映されている法
なのである。ということは、放送法の存
在そのもの、その基本理念それ自体が
「戦後レジームからの脱却」とパッティ
ングするのである。

「政治的公平」規定が必要だという
きに、テレビというマスメディアがその
優位性を保持するための主張ではなく、
原理的な問題として捉え返さなければ
ならない。そうでないと、マスメディア
のエゴとされるであらうし、「狡猾な仕
組み、仕掛け」にはまるであらう。

ついでに言えば、放送局は新入社員
教育、管理職研修、役員就任時、など
で放送法を学習するべきである。(※1)

[W]

しかし、この問題を巡る議論として、
こうした政治力学や法的アプローチで
はなく、放送というメディアの構造、在
り方など、メディア論的と言つてよいで
あらう問題の提起が希薄なのが気になる。
では、私たちとつて一体何が語られ
るべきなのだろう。いくつかの「論点に
なるべき点」を取り上げてみよう。

① マスメディアは近代社会の登場に
深く関わる。市民社会が旧権力と戦う
ために手にした「言論表現の自由」の
意味は大きい。

同時に、その市民社会は国民国家とい
う形態と二重構造を形成し、そこでは
近代的メディアは共通の言語空間の
形成と維持という機能を果たしてき
た。そこにナショナリズムが成立する。

(※2)

表現の自由(市民社会)と共通の言語
空間(国民国家)との関係(乖離)に
メディアはどう関わるのか。

② 放送は周波数管理(免許制度)の体
系下に置かれる。それは周波数の希少
性や混信防止という技術的理由によ
るものだけでなく、情報のライブ性
(同時性/共時性)というメディア特性
による。国家は時間管理の危うさを先
験的かつ先見的に知っていたのであ
る。

③ そもそも放送法体系が施設(無線局
免許(ハード規制)(※3)を基に構成
されているのは、憲法における「表現
の自由」との関係を法技術的に巧みに
取り込んだものであろう。番組編集に
対して間接規制であり、無線局として
の免許主体である放送事業者が番組
編集責任を有するとされたのである
(ハード・ソフト一致原則)(※4)

(※5)。その意味を踏まえて「4条問
題」は論じられなければならない。放
送は構造的に規制が組み込まれてい
るからこそ、「自由」の意味を深く問い
返すことができるのである。

④ 放送は公共的な存在だと放送事業
者は言い、またそのように受け止めら
れている。その理由は何か。しばしば
「公共の電波を利用するから」というの
が、その根拠とされる。しかし、それ
はほとんどトートロジーである。一方、
《規制緩和》の立場からは、放送も市場
原理に委ねられるべきであり、市場が
最適解を導くであらうと語られる。

しかし、放送において市場が最適解を
出すとは限らない。放送の公共性は
人々の共同性とともにあり、それを基
にして行為として示されるべきであ
らう。

⑤ 放送は、同時的により多くの人々に
情報を伝えることができるメディア
である。しかし、そうしたメディア特
性はネット系の技術進歩とその社会
的定着により、相対的なものになりつ
つある。こうした状況で、放送メデ
ィアが「これこそ放送の根底にあるもの」
だといふべきは何かといえ、それは
「情報編集責任」ということになる、
と私は考える。権力がメディアに対
してフェイクニュースという言葉を使
うにつけるこの時代において、情報編集
責任とは何か。

[W]

「メディアは出来事の一部であり、テ
ロの恐怖の一部であつて、双方に作用し
ているのだ。」と語つたのは、ジャン・ボ
ードリアルである。(「テロリズムの精
神」季刊《環》8巻2002) また、鷲田
清一氏は「テキストの外などというもの
は存在しない」というジャック・デリタ
の言葉を引きつつ、「いかなる歴史的事
実も語られたもの、つまりはテキストと
してしかありえない。事実が解釈され、
編集されて伝えられる。」(「折々の言葉」
朝日新聞2018.3.3.)と書いている。

《事件》があり、それを「客観的」に
伝えるのがメディアの仕事、というわけ
にはいかない時代に私たちはいる。情報

編集責任とは、そして放送の公共性とは
何か、いまあらためて放送メディアが自
らに問うべきなのだ。それが、メディア
の自立であり自律であらう。そこから、
状況と制度への問い返しが始まる。

※1、25年以上も前、メディア企画部門に
いた時に放送法と放送制度について田代功
氏から懇切丁寧な解説を受けた。田代氏は
郵政省から放送業界に移られ、後にローカ
ル局の経営に携わられた。同氏は役人は法
律で考えます。政府与党よりも法が大事な
のです」としばしば語っていた。

※2、ベネディクト・アンダーソン「想像の
共同体 ナショナリズムの起源と流行」参
照

※3、施設免許に対して、事業免許はサービ
ス内容を直接規制対象とする。

※4、現放送法でいう「特定地上基幹放送事
業者」である地上テレビ放送も、ハード・
ソフト一致(施設免許≡無線局免許)であ
る。

※5、BS放送はハードとソフトが分離され
ているので、ハード事業者はBS11、BS
会社はソフト事業者として認定を申請/更
新することになるが、その際の主たる対象
は放送事業者間の資本関係、所謂「マスメ
ディア集中排除原則」である。

第15回 人気番組メモリー

世界ふしぎ発見

日時・2月24日(土) 13時半〜16時半

場所・横浜情報文化センター・情文ホール

ゲスト・草野 仁(出演・番組司会)

竹内海南江(ミステリー・ハンター)

重延 浩(テレビマンユニオン・プロデューサー)

司会・八木康夫(放送人の会)

八木 この番組は来年1500回を迎えるそうです。クイズ番組、バラエティー番組としてはありえないような長寿番組です。

まずこの番組がどのように生まれたかについて…

重延 この番組が始まったのは1986年の4月です。今は9時から放送ですが、最初は土曜日の10時からだったんです。私が企画書



を書いたのですが、当時はパソコンもワープロもなくて手書きです。タイトルは「セブンミステリー」です。豪華テレビジョンが新しいコンセプトであなたを狙っていますという内容のものを持ち歩きました。スポンサーとして日立さんに共感していただき、ではまず司会者ということで草野さんのところへ行きました。

草野 そうなんです。新しい番組の司会というお話で、私は即座にお断りしました。

私はNHKではスポーツあるいは報道系の番組しかやることがなく、エンターテインメントの番組の経験がありません。「とても無理です」とお断りしました。すると重延さんは「まず企画書を読んでみてください」と言います。企画書を開くと「あなたもインディ・ジョーンズになってみたいと思いませんか」とうたい文句があり、さらにページをめくると、この番組は歴史を楽しく遊ぶのだけれど、どんなことができるかと言うと、例えば、エジプトではピラミッドはどうやって作られたか、ツタンカーメンはどんな人生を送ったのか、など50くらいの項目が並んでいる。これを広げて行くと10年は続く番組になります、とあります。素敵な企画書で気持ちいい動いたのですが、当時活躍していた大橋巨泉さん、関口宏さん、あんな方のようにできませんでした。無理です、と断りました。すると、「いやこの番組では新しい司会者像を作ってもらいたいのです」とだんだん重延さんペースになって、3時間ほど話して「それではやってみましょうか」と返事をしておりまして。

重延 受けていただいていた大変嬉しかったです。次に黒柳徹子さんですが、あの方とはもう53

年のお付き合いです。でもこの番組については最初は断られました。「番組に出て、クイズの答えを書く、頭がいいか悪いかバレーちゃう。だから私はクイズ番組はやらないことにしてる」との返事です。私は「これで歴史の勉強ができます。歴史の勉強をするきっかけになさってはどうですか」と言いました。黒柳さんは歴史の教科書を墨で真っ黒に塗り潰した世代で、きちんとした歴史の勉強をしていない。それなのにユニセフの国連親善大使としていろんな国へ行く、アフリカにどんな国があるかも知らないのに、と聞いていたからです。黒柳さんは心を動かし、「私、勉強をします。」

こうして番組はスタートしました。

—第1回放送分の一部を上映—

エジプト編で、100万を表わす文字はどんな形?のクイズが出されている。

重延 草野さん覚えていますか?

草野 いや、覚えてないなあ。司会をするときに夢中で…当初、「硬い、面白くない」と言われたことしか頭の中に残っていません。

出演の皆さんは和田アキ子さん、井上順さんなど、芸能界で本当に大きな存在の方ばかりで、そんな方を相手にどうやればいいのだろうと思ひ悩みました。ひとつ気がついたのは、回答者の皆さんがどうしても知りたいと思う正解をあの場で私一人だけがあらかじめ知っている。この有利性を何とか生かそうと思ひました。回答者に優しく寄り添うようなふりをして、実はあかさないと、逆に冷たそうなお話を言いながらボロっとヒントを与えているとか、やっていました。

重延 それから野々村真くん。最初は「誠」だったのですが、あまりにクイズが当たらないので「真」に変えたら少しは当たるかと思ったのですが、どうでしょう。

草野 黒柳さんは1問目から当たっていました。さすがですね。

—当時の台本を会場の大画面で紹介—
ガリ版刷りである。

重延 いまは高視聴率の番組とされていますが、最初は苦戦の連続です。当時はテレビを見る人が多かったので、15%とるとまあまあ高視聴率でしたが、第1回は6・6%、2回目はマヤを扱って5・6%、3回目はポロブドゥールで3・5%とさんさんの結果です。

草野 3回目はゴールデンウィークの真ん中、それにポロブドゥールはほとんど知られていませんでした。

週刊S誌には「あのプロデューサーはまもなくクビになるだろう」と書かれました。

重延 その後も苦戦は続き、7回目までは一桁、二桁の視聴率をとったのは8回目です。やっと、アジアをやることになって、タイの奥地に行きました。そこで納豆に出会いました。「日本の納豆と同じだ」とミステリーハンターも驚きました。タイには日本と共通するものが多いです。それまで視聴者が知らないことを教えてあげるという上から目線の作り方だったのが、発見した驚きを伝えるようになったのですね。発見した驚きを伝えるのはまずミステリーハンターでなかでもシンボルと言っている存在が竹内海南江さんです。

竹内 私が最初にやったのはバリ万博です。

87年11月放送でした。日本からお侍がバリ万博にやって来たということで、お侍の恰好と芸者の恰好になり、そこからコスプレの歴史が始まりました。

重延 ミステリーハンターの前にコスプレをやったのが草野さんです。

草野 番組の活路を開こうといういろいろやりました。例えば西郷さんの恰好で犬を連れて出てくる、ガンマンになってピストルを撃ちまくる、アルゼンチンタンゴを1分間踊る、など。タンゴはプロのダンサーに教わったのですが、どんな世界もプロは凄いと体験できました。



重延 ドラキュラはうまく行くはずだったのですが…

草野 オープニングで暗いスタジオの中に棺桶が運びこまれてくると、黒柳さんが「この中から草野さんが出てくるのよ!」と叫んでぶちこわしになってしまった。

八木 ではここで番組の作り方の説明をして

いただきます。

重延 番組は1本作るのにほぼ3カ月半かかります。工程表をお目にかけます。①企画が出され、リサーチャーが企画の内容を深めて行く。②取材先との交渉です。各国の取材許可を求めるのですが、現地のコーディネーターの協力をお願いしても難航し、ときに挫折することもあります。③スタッフの決定です。ディレクター、カメラマンのスケジュールを調整します。④構成です。

草野 重延さんはこのクイズの構成については「面白い質問に、聞いてびっくりする答えを」と強調しておられました。

重延 ⑤ミステリーハンターの決定。⑥ロケハン。現地に行く情報と違っていることがたくさんあって、現地で初めてわかることもあります。⑦構成台本の作成です。みんなの目線でこれなら「ふしぎ発見」のレベルだというものを練り上げます。⑧ロケーションです。ほぼ2週間。ディレクター、カメラマン、ミステリーハンターなど7名くらい。行くのは5名。現地のコーディネーターが2名です。**竹内** 小人数で小回りが利くのですが、健康管理に気を使います。

重延 ⑨撮ってきたものの編集。⑩スタジオでの収録。⑪収録したものを番組の形に編集します。⑫放送局へ納品。納品したあと局では審査が放送に適當かどうかチェックして放送されます。こんな工程ですからほぼ3カ月半かかり常時10チームくらいが動いています。

草野 歴史を扱うことが多いので、ロケハンに行くとき現地を撮れるもの、撮れないものいろいろあり、場合によっては再現シーンを作

るなどいろんな工夫が必要です。**八木** ゲストの魅力をどう引き出すかの工夫もあつたとおもいます。

草野 NHKで「司会者は主役ではない。出演者が持っているものを十分引き出すのが司会者の仕事だ」と教え込まれていました。

「ふしぎ発見」の出演者の魅力をどう引き出すかはいつも考えていました。

重延 草野さんは回答者の答えが当たっているのにはずれているようなふり、はずれているのにあたっているようなふりをしますね。

草野 あれは対黒柳さん作戦なのです。私の手元には回答者の答えが見えるようになっていますが、それをみて私がどんな表情をするか黒柳さんはチェックしていて、私が笑ったりすると黒柳さんは答えを書き直したりする。それに気づいたので答えが正しいかどうかはぐらかすようにしています。

重延 竹内さんはどんなことを考えてきたのですか？

竹内 30年やっていますが、初期は情報通信については石器時代で、ファックスがなくてテレックスです。あれで外国のコーディネーターと連絡をとって、行ったらなかった、違っていた、といった、行き当たりばつたりの取材を体験してきました。うまく行かないのが当たり前で、それをいかにして楽しいものに変えて行くかをいつの間にか訓練されていきました。あとどこでも寝られる、何でも食べられる、体が丈夫で、無理に何かをしなくちゃとの負荷がかかっていない、そんなことで鮮度が保っていられます。

八木 どうしても持って行く大切な持ち物は何かですか？

竹内 スタッフがどうしたらおいしく食べられるかを考え、塩、あるいは七味唐辛子、高地ではうまみ成分などを用意します。

重延 ずっと水がなくて困ったとき竹内さんが凄いいものを持っていたとか。

竹内 アルジェリアのタッシリナジェルです。6日の野宿だったのですが、日中は気温50度、1200メートルの断崖を登ってから河床を歩く。みんな水の飲み方が下手で喉が渇くとどんどん水を飲む。これはちよつとあぶないと思って、自分の持っていたミネラルウォーターには手をつけず、現地の人が用意していた調理用の水道水にまず切り替え、自分のからだをその水に馴れるようにした。3リットルのミネラルウォーターは6日間リュックの中で、気温50度の中、毎日6時間、7時間歩いてた。最期にゴールというとき、背中のリュックからみんなの前に3リットルのボトルをばん!と出しました。誰も水はなくて、号泣の状態でした。

草野 竹内さんはじめみなさんの活躍で「ミステリーハンターになりたい、なりたかった」という声を全国どこでも山のように聞きます。いまや憧れの職業です。しかし、アルジェリアでは6日間、炎天下、野宿、お風呂に入れない、楽な仕事ではありません。

竹内 きつい、汚い、危険、結婚できない、のK、いまは更年期、高脂血症などいろいろなことを言っています。大変だからやりがいがあるのですが、肉体的にも精神的にもタフさ鈍感力が必要です。

重延 スタジオでは出水さんの役割も重要です。英語力が素晴らしいのでミステリーハンターとしても登場します。

草野 目立ちたい女子アナは多いのですが、

出水さんはチームの一員として求められている役割をきちんと理解して振る舞っているの
で、司会者としては本当に助かります。

重延 よくある質問は「黒柳さんはどうしてあんなに当たるのか」「野々村真くんはどうしてあんなにあたらないのか」です。黒柳さんはまず記憶力が凄い。

草野 50歳代から30年間、ふつうなら記憶力やスピード感が衰えて行く年齢ですが、一度も衰えたと感じたことはありません。

重延 そして勉強している。さっきも言いましたが毎回7冊くらい本を読んできます。スタジオではクイズが出題されると横の紙に5つくらい答えを書き、質問をしてはそれをつずつ消して行く。最後に「正しいと思える答えは必ずしも正しくない。それは面白くないからだ。答えはできればびつくりするようなものがない」と彼女は知っているの、どれがびつくりする答えかとスタッフの気持ちで考える。それで正解の確率が高いのです。それに今日の取材のディレクターは誰か、ディレクターの癖まで知っています。そして草野さんの動きをじつと観察し、あらゆる総合力を駆使して推理する。そして当たらないとあとで私に「あの問題ひどいわね」と言う。黒柳さんにとって正解できない問題は悪い問題なのです。

草野 本当に負けず嫌いです。当たらないと「わたし、本で読んであの答えを書いたのだけど、草野さんあなた間違えてない？」と問い詰められました。正解への執着は強い。毎週の勉強を30年間一度も欠かしたことがない。どんなに忙しくても数冊の本は読む。モ

ーツアルトのときは16冊読んだそうです。

重延 で、もう一人。野々村真はどうして当たらないか？実は正答率は27%。3割近く当たっているのです。不思議なことに黒柳さんと同じ答えを書くことが意外にある。二人は感性は合うのです。しかし、説明はまるでダメなんです。そして、たった一人当たることもある。不思議な人です。

― 竹内海南江さんがピラミッドの頂きまで登る映像を上映 ―

考古学者を手伝って、石の一つ一つの大きさを測りながら登る。勾配は急で、下を見ると目がくらむ。頂上からの展望は360度なにも遮るものがない絶景で、スフィックスが小さくみえる。

竹内 やつてしまいました！



ピラミッドに登ることは「ふしぎ発見」が始まるころから全面禁止になっていました。この30年間、世界の考古学者から計測して登りたいとの申請が何度も出されて許可がおりなかった。「ふしぎ発見」もエジプトへ行くたびにピラミッドに登りたいと申請と交渉を繰り返してきました。やっと登頂の許可がおりたのは「ふしぎ発見」の諦めない凄いい強いさのおかげです。エジプトの遺跡調査は何度

もやっていますが、真面目で失礼がない、事故がないという実績をこつこつ積み重ねたことがエジプトの当局に認められたのだと思います。

しかし、登るにあたっては、世界遺産なのでどこかに杭を打って命綱を使うことが許されない。誰も頼ることなく、自分の力だけで登ることになりました。腕の力を鍛えようと腕立て伏せを始めましたが2回しかできない。無理をして怪我をしてもいけないので、あとは運任せです。私は高い所は得意じゃないので、登るあいだ一度も振り向いていません。まず滑らない靴を用意する。ストレッチパンツをはく。肘をつき、膝をつくので、バレーボール用の肘、膝のパットを買った。そして革の手袋です。200段を登ったのでみんな擦り切れてぼろぼろです。石を計測することは事前に知らされていなくて、河合さんが直前に言い出して始めました。それで登るのに5時間半かかりました。背中にチョコバーとペットボトルを背負って、途中のちよつと広いところで休憩してみんなで食べました。それから登って、頂上で感動して、35分で降りちやいました。

高さというのはある限界を越えると麻痺するんですね。行きあたりばったりで何を言っただか記憶にないのですが、後でみると意外にちゃんとしたことと喋っていました。

八木 いままで一番きつかった、ハードだったチャレンジは？

竹内 終わってしまったみなさんとみんな楽しい思い出ですが、時代とともに状況が変わり、いまでは絶対に入れないところ、逆に今は楽に行けるところとさまですね。あるとき

だから撮れたという貴重なものが残っているのは嬉しいですね。

八木 では、一番素晴らしい光景は？

竹内 サハラ砂漠でしょうか。広い大海原を小舟で漂う状況を想像してください。それが海の水でなくて全部砂。そこを2週間移動しているだけ。何にも遮るものがなく、灯りもなく、お日様が出たら朝、沈んだら夜、夜は何にもないから満天の星空を見る。これは鳥取砂丘では体験できません。それから、グラインドキヤニオンに流れるコロラド・リバーの川下りです。ラフティングといって大きなゴムボートに食料とテントを積んで行きます。スタート地点からゴールまで500キロです。東京・大阪間をずっと濁流下り、いつもびしょぬれという10日間です。ただ舟に乗って、両側の断崖絶壁に刻まれている30億年から20億年の地球の歴史を見ながら下って行くだけです。これでよく2本の番組ができたのだと思います。

― 15分休憩 ―

八木 スポンサーのことを話してください。

重延 最初から今までもずっと日立さんの1社提供です。かつては日立製作所でしたが、いまは日立グループです。この番組が始まるころはまだバブル期で大きな企業は自分の番組を持っていた。松下電器の「水戸黄門」、東芝の「日曜劇場」などがそうですが、今は1社提供の番組はほとんどなくなりました。日立さんはいまも1社提供をやめるとは考えておられません。

日立は1910年創業で2010年が創業100年です。それを機に日立スペシャルをやることになりました。皆さんご存知の「こ

の木なんの木」の木があるハワイへ行き、あの木の下をスタジオがわりにして番組を作りました。日立さんは単なるスポンサーでなく一緒に番組を考えてくれる存在でした。そのことを重荷に思わず、一緒に楽しくやりたいという気持ちがお互いに通じています。

番組30周年でのパーティーのために作った15分ほどのVTRがあります。番組でやってきたことと日立さんが考えていることが結びついていることがわかったと思います。

―上映―
番組のハイライト、世界の絶景、遺跡、さまざまな不思議が紹介されている。

草野 これを見てあらためて素晴らしい番組だとつくづく思います。歴史の長さ、重さですね。

どうしてこんなに長く続いたのかとの質問をよく受けます。いろんな理由がありますが、まず日立さんの1社提供のおかげです、と答えます。番組の初期、視聴率が3・5%になったとき、現場の局もどうしようとはたばたしていました。その時、日立の伊藤宣伝部長は「皆さん何を慌てているんですか？みなさんは歴史と遊ぶと言ったんじゃないのですか？それをちゃんと貫徹してください」と私たちに投げ返しました。それでやるべきことをやろうと、原点に立ち戻ることができました。

リーマンショックのとき日立は8千億の赤字を抱え込み、私たちは番組が終わることを覚悟したのですが、日立さんは「ふしぎ発見は続けます。しっかりとやってください」との言葉でした。

重延 日立はものを作って売るだけの会社じゃない。社会を良くしたいとの思いが強く、文化への理解が深い。

草野 先ほどのハワイの「この木なんの木」の木はモンキーポッド(学名・サマネア・サマン、俗名・アメリカネム)といい、中南米原産の植物でハワイに持ってきて植えてみるとどんどん育つて、デーモン家所有のデーモン公園(モアナルア・ガーデン)に立っています。30数年前に日立の人がこの木をみて、日立のシンボルにしようと決め、毎年かなりの額の維持管理費をデーモン家に払って大切に使っています。

いま日立は日本だけでなく世界の企業として、世界の人類に貢献すること目標にしています。そんな企業に「ふしぎ発見」は支えられました。

八木 私も視聴率には一喜一憂してきましたが、重延さん視聴率について：

重延 「ふしぎ発見」は土曜日放送ですが、視聴率は月曜日に通知箋で伝えられます。9・9%でがっかりし、10%で大喜びしています。一番高いときは22%まで行きました。これはまだテレビを見る人が多かった時代です。その後インターネット、スマホが普及し、テレビを見る人、特に若い人が少なくなりました。高視聴率の基準はだんだん下がって、いまは10%を超えるか超えないかが基準になっています。

大事なことは素晴らしい番組を作り続けることで、それ以外に長い間高い視聴率をとる方法はありません。

八木 長期間番組続けるにはやはりいろんな秘策があったと思います。同じことをやっ

ていたのではダメになるし、企業秘密かもしれないそんな秘訣を：

重延 まず、草野さん。第1回から無欠席です。それから黒柳さん。無欠席です。黒柳さんはこの間大腿骨折をなさっています。骨折の1カ月後、彼女は舞台がありました。彼女は自分のことを舞台女優といいます。映画やテレビドラマに出ることは特別ゲストのことではありますが、基本的にありません。舞台は幸いなことに老人ホームの話で、稽古は杖をついてやったそうです。1カ月東京、大阪で公演して「ふしぎ発見」は欠席しなかった。スタッフでは1回目からやっている人が12名いる。ずっと一緒にやってきたというお互いの信頼感がベースに流れているんです。そんなメンバーが若い人たちとやってきました。

草野 何故歴史をテーマにしたクイズ番組をやるようになったかという、歴史に関心を持つている人は多い。しかし高齢の人が受けた歴史教育は歴史年表の年代と出来事をいっぱい覚えていてという成績がとれる詰め込み偏重教育です。いつてみればつまらない教育を受けてきた。しかし、歴史は人間の行動の積み重ねですから不思議なこと、面白いことが山ほどある。それをテーマにして、知識を競うのでなく、面白おかしく、かつ緊張感を持つためにクイズにしようとの番組はスタートしました。無限に続きそうなものです。

現在スタッフは音声、カメラまで含めると百数十人、その総勢でスタジオの収録の前にリハーサルをします。問題を知らないスタッフを回答者にしてクイズを出します。正解の場合は取材班が持ち帰ったささやかなお土産をさしあげます。もう何年もやっていますが、

何年たつてもみんな一所懸命回答し、不思議な一体感がうまれています。

重延 関係者は名前はおわかりなので申し上げますが、高齡の方がいて、次がいまは出演していませんが板東英一さんがいて、それから私、そして草野さんです。高齡の男3人にはいくつかの共通点があります。まず野球好き。板東さんはプロですが、気がつくとも3人で昔のプロ野球の話をしている。もう一つは日本本土で生まれていないのです。草野さんと板東さんは満州、私は樺太からの引揚者です。黒柳さんは青森県に疎開していた。それぞれ戦争を経験していて、歴史がいかに人間に大きな影響を残すか、ときには素晴らしいものを残すかという歴史観を共有しています。それが番組の原点にあり、どんな話をしても解り合える自信があります。それに以下の世代が加わっています。若い世代が入ってきていろいろ変わりますが、「歴史と遊ぶ」というテーマは変えません。

女性スタッフも多くて社名のテレビマンユニオンをテレビウーマンユニオンに変えたら、という意見もあります。ゲスト回答者はいろんな方をお願いしてきました。例えば羽仁進さん。

草野 羽仁さんはほんとうに歴史に詳しい方ですが、あまりに理屈っぽい。熱心な勉強家で正解率が高かった。

重延 面白かったのは映画監督の大島渚さん。社会派監督ですが、実はクイズが大好き。

草野 大島さんは東大の新聞研究所で講師をしていて、私は当時在学中で講義を受けたことがあります。それから池田満寿夫さん。負けず嫌いの方で、不正解になった回答につい

て、次の出演のとき数冊の本を持参して、「この通り僕の回答の方が近い。あなたの言うことはおかしい」と抗議されました。愛すべきかたでした。

重延 レオナルド・ダビンチのときでした。

草野 それから映画俳優の川口浩さん。川口浩探検隊で有名ですが、この番組に出て、歴史の問題にチャレンジすることが自分の中にこんなに真剣さと呼び起こすものかと感動していました。正解した時の快感は凄い！この番組に惚れ込んでいました。

重延 草野さんにご迷惑をかけたのじゃないかと思うのが岡本太郎さん。

草野 あれは大変でした。「わつ」と手を広げるポーズをするとお客さんが喜ぶことを意識して、どこでも「わつ」とやっていました。話してみるといろんなことを忘れている。フランスのカルチェ・ラタンでの生活はいかがでしたか？と聞くと「えっ忘れた」との答えです。肝心ことはほとんど忘れている。回答者としての岡本さんに「はいどうぞ回答をお書きください」というとペンが動かない。「書いてください」と言つと「書けない」。これは困りました。

重延 スタジオでは何が起るかかわからない。それがクイズ番組の面白いところで、台本に書いてあつてその通り答えるというのでは全くない。何が出てくるかハブニングの連続です。歴史と遊ぶので、ゲスト回答者には文化人が多いですが、今その役割を果たしているのはロバート・キャンベルさん。

草野 漢文学の専門家ですが、これほど日本について深い知識を持つておられる方はなかなかいない。最近はおバクンにしても厚切り

ジェイソンにしても日本についての研究心が猛烈旺盛です。難しい漢字をびしつと書ける。

重延 他には、僕たちは「まわす」と言うのですが、進行をスムーズにする役割で岡田くん、山崎くん、アズマックス、土田くん、俳優で八島さん、そんな人があつた場を作つて行く。若い人を入れるとツイッターが増える。居間視聴率のほかにツイッターも含めての媒体価値の判断があります。それもあるとA K Bを入れたりして司会者を困らせています。いま強引にやっているのはサンドウィッチマン。一つの席に二人を座らせています。

そんな風にいろいろ変化させて番組を動かしています。

私が尊敬するテレビマンに横澤彪さんがあります。「笑つていいとも」を作り、たけしさんまを育てた人です。その横澤さんが「世界ふしぎ発見はいま一番新しいと思う」と言う。「え？歴史と伝統のある番組と言われますが」と答えると「何が新しいかというと、新しいものをやっているから新しいのではなくて、いつのまにか番組を少しずつ変えている。これが一番新しい」と言われました。そして「いろんな番組を見ているが、ふしぎ発見の変わり方が一番手だ」と言われました。視聴者の期待を裏切らず、気がつかれないように少しずつ変えて行く、それを見抜いているプロは凄いな、と思いました。

草野 ちなみに横澤さんは大学の同じ学科の先輩です。可愛がつていただきました。

重延 私は横浜ベイスターズの話ばかりしていました。

八木 会場でベイスターズのファンの方は？――斉に手があがる――

重延 黒柳さんは野球にはメチャクチャな人で、長嶋監督と会つて「どうしてバッターはいつも右側に走るんですか？左側に走っちゃいけないんですか？」と聞いた。(笑い)長嶋さんは「ああ考えてみるとそうですね。でも左側に走つて行くと反対から走つてきた人にぶつかっちゃう」(笑い)。

草野 司会をする側からも番組内容の変化は感じていました。そもそもは5人の回答者で始まりました。それが一時期7人にまで増えました。番組にいろんな彩りをつけたいという意図だったのでしょうか。現在は6人です。出演者も変わつてきています。傳谷英里佳さんなどかなり若い人が出ています。

取材のVTRは昔はやや薄めです。その分トクが多かったのですが、だんだん正確な情報をきつちり伝えようと厚みを増しています。

八木 この番組の価値を一口で言うとは？

重延 やはり「人間つて素晴らしい」と伝えたい。歴史も何もかも人間が関わっている。それをまっすぐに正直に伝えたい。それがこの番組の価値だと思います。さらに言えば①良質である②視聴率が高い③収益がなければいけない、この3つを揃えるのはプロ的には非常に難しい。一つだけならやり方はいろいろある。二つとなると難しい。3つ揃えるのは実に大変なことで、プロ集団だからできるレベルの高い戦いです。その戦いを楽しんでいます。

八木 2年後は2020年、来年は1500回を迎えるわけですが、それに向かつての覚悟を…

重延 原点は変えない。原点の成功の中で少しずつ変化させる。変化は4月以降やります。

テレビの見方は大きく変わりました。30代以下はスマホのモニターでは見ていません。みんな端末、スマホ、パソコンで見ている。これは視聴率に入つてこない。タイムシフトといつて時間をずらして見るのも視聴率に入つてきません。視聴率がすべてだとは思いませんが、そんなお客さんとも結びついて行きたい。時代に向けても新しくならなくては行けない。そのために自分を鍛え上げていきます。こんなに多くの人が一緒に見て感動できるメディアはテレビ以外にありません。それがテレビの価値だと思つてやっています。その原点を忘れず、挑戦して行きます。

草野 他に見たいテレビ番組がなくて「ふしぎ発見」が一番いいね、と言つてくださる方が多くあります。バラエティー、トーク、食べ歩きなどの番組が圧倒的に多く、どこを見てもあまり変わらないが、「ふしぎ発見」は情報をちゃんと伝えて見どころがあると、言われます。更に高いレベルの情報を伝えるよう精査していこうと思います。

竹内 ミステリーハンターがいつのまにか職業名になっていますが、私の先には誰もいないので、これからどこまでやり続けることができるかという領域に入っています。老化は逃げることでできないのなんとか進歩、進化して、長老としての役割を果たしたいと思っています。

――会場からの質問――

質問 小学生のときから3世代でみています。幅広い題材を楽しんでいます。重延さんへの質問ですが、これまでやろうとしてやれなかったテーマで、これからやりたいテーマがあったら教えていただきたい。草野さんにも同

ラジオのページ

第17回放送人グランプリ特集

☆準グランプリ受賞

オールナイトニッポン50年

三原治

ニッポン放送の「オールナイトニッポン」が「第17回放送人グランプリ」で準グランプリ賞に輝いた。

1967年のスタートから50年、深夜放送の若者文化を生んだ金字塔。この番組で蒔いた種は、新たな才能として多くの分野で花開き、若者のみならず、日本の新たなカルチャーを作り上げた。歴代制作者のフロンティア精神と時代を見据えた先見性、見識は卓越で、ラジオ文化の発展に寄与している。

「オールナイトニッポン」がスタートした1967年は、団塊の世代（47～49年生まれ）が大学生になっていた頃で、リスナー人口が多い時代で、この聴き手の多さが爆発的人気の発火点になっていた。そして時代は受験戦争へ。中高生が受験勉強をしながら、深夜放送を聴くスタイルは当たり前となり社会現象になっていく。

当時、テレビの普及により、民放ラジオの広告収入が激減し、新しい聴取者層とスポンサー開拓が求められていたときに、「オールナイトニッポン」の登場はラジオ界の神風だった。

ラジオ深夜放送が築いたDJスタイルは、若者を惹きつけた。深夜放送は、今でいうSNSのような存在だったと言える。

60年代は、糸居五郎、高崎一郎、斉藤安弘、

亀淵昭信などの局アナやディレクターがラジオDJを担当し、「深夜の解放区」という時間帯に若者文化を開花させた。

それまでのアナウンサーからは想像も出来ないフレッシュで个性的なDJが揃っていた。70年代、80年代には、吉田拓郎、松山千春、南こうせつ、桑田佳祐、中島みゆきなどニューミュージックのアーティストが務め、さらにビートルたけし、タモリ、笑福亭鶴光などエンターテインメント・パーソナリティと多彩に新陳代謝を繰り返した。みんなトークが面白かった。

90年代には、福山雅治、松任谷由美と、綺羅星の如くビッグネームが並び、常に時代を共鳴させながら変化し、昭和から平成の時代を駆け抜け今日に至っている。

今、注目なのは、星野源で、音楽中心のトークから、軟派な下ネタまで遊び心満載の放送を展開させている。放送批評懇談会が優れたテレビやラジオ番組に贈る「ギャラクシー賞」のラジオ部門DJ・パーソナリティ賞を去年、受賞した。「オールナイトニッポン」のパーソナリティがこの賞を受賞するのは初めてだ。

こうした50年の番組継続は確固とした編成方針、そしてパーソナリティの発掘から演出まで総合力の結集が結果として実り、多数のリスナーを吸収して看板プログラムとして存在し続けてきた。

時代と共に若者と共に50年にわたり、才能豊かな数々のパーソナリティを見出し、リスナーと寄り添い、深夜の解放区として、話題や文化の発信基地となっている。その功績は大きい。

今の若者はラジオもラジカセも持っていない。そもそもラジオというものを知らない。

「周波数を合わせるって何？」と首をかしげる。そのようにラジオ離れが叫ばれるなかで、スマートフォンでラジオが聴けるアプリ「ラジコ」の登場により、若者の人氣が復活の兆しを見せている。

若い世代、特にティーンズにはラジオを聴いてもらいたい。未来への種を蒔くことであり、未来への投資でもある。そのために「オールナイトニッポン」が若者へ魅力ある番組を作り続ける意味は重要だ。50年おめでとう。このテーマソングには、それぞれの時代の青春がある。

♪君が踊り僕が歌う時、新しい時代の夜が生まれる。太陽の代わりに音楽を、青空の代わりに夢を、フレッシュな夜をリードするオールナイトニッポン。

（放送人の会理事・日大放送学科講師）

☆特別賞受賞

小林克也氏の挑戦は続く

田中秋夫

「キングオブDJ」と呼ばれ48年にわたりラジオの第一線を走り続けている小林克也・愛称KORBY（コービー）が77歳の喜寿を迎え、3月28日に信濃町のマックススタジオで祝う会が開かれた。

会場には彼を「レジェンド」と慕うラジオ界や音楽界の面々が200人ほど詰めかけた。会場では彼が率いるナンバーワンバンドが喜寿を記念して発売した25年振りの新アルバム「鯛く最後の晩餐」のナンバーを次々に披

じ質問をしたいのですが、竹内さんにはこれから行きたいところを言っていたきたい。それからできれば、草野さんには「世界ふしぎ発見」と番組のように言ってください。

重延 具体的ではないのですが、私は樺太に生まれていますので国境が気になっています。

「ふしぎ発見」ではやっていませんが東西ドイツの統一が美術館をテレビで編集して実現しました。北朝鮮・韓国の間にはDMZ（非武装中立地帯）が広がっていますが、両軍が絶対に入ってはいけない地域で、その取材をしたことがあります。人間が入ってこないで動物は安心して子供を育てている。植物は伸び放題という環境です。いまは、この取材はできません。みんなに笑われるのですが、北朝鮮に恐竜が棲んでいると噂される湖があります。「北朝鮮のネス湖」と題して高視聴率を狙いたのですが、（笑い）北朝鮮にはなかなか入れないのですが、行くべきところへは行きたいとあきらめません。

竹内 私はアジアが少なくアフリカが多かったです。アフリカには日本と全く違う文化が残っています。知らないところへ行くのは今もわくわく、どきどきですから、しっかりとリサーチして、しっかりと準備していった、しっかりとリポートしたい気合があります。

草野 いろんなジャンルにチャレンジすることと続けたいと思います。最近は人体についてのさまざまな真実が明らかになってきて、健康のためにどうすればいいかは日進月歩で進んでいます。その焦点をあててやってみたいとおもっています。

それでは「要望」に応えて

「ラストミステリー、ふしぎ発見！」

露した。

アルバムタイトルは喜寿を迎える「めで鯛」と「おそらくこれが最後(笑)」という想いを込めて名付けたという。生演奏で歌った克也氏のボーカルは喜寿とは思えない艶があり、参加者は衰えを見せない彼のバイタリティに驚かされた。

幼いころから洋楽を愛し、日本を代表するDJとして多方面に活躍する小林克也。

1941年、真珠湾攻撃の年に広島県の福山市に生まれた克也氏が子供の頃におもちゃの代わりに親しんだのはラジオだったという。特に中学、高校時代には米軍岩国基地のラジオ局FENの音楽番組を聴いてディスクジョッキーに憧れたという。

彼はこの頃を回想して「僕の育った時代はラジオしかなくて、ラジオから音楽やドラマが流れると映像を想像して頭の中で結びつけるからスケールが大きいんですよ。ラジオで学んだイメージさせる力は、今も仕事の基本になっていると思います」(週刊ポスト2017・6・16日号)と語っている。

広島から上京して慶応義塾大学に入学するとFENを聴いて学んだ英語力と洋楽の知識を武器に外人相手のナイトクラブの司会等で稼いでいたという。

やがてそのエッジの利いたトークと英語力が評価され1970年にラジオ関東から音楽番組の声がかり「バブリング・オブ・ポップス」でDJデビューする。ラジオ界では先輩にあたる洋楽番組の大物司会者は何人か存在していたが、彼のような本格的発音とアメリカンDJスタイルは新鮮で瞬く間に人気DJの地位を確立していった。

その後、ラジオ・TV各局で数々のDJ番組を担当し、「スネークマンショー」やTVの「ベストヒットUSA」等、伝説の名番組を生み出し、今や「キングオブDJ」と呼ばれるまでになった。

そんな中、筆者がFMANACK5の編成責任者になった1990年にスタートした番組が「ファンキーフライデー」である。今でも続くその番組は毎週金曜日の朝9時から夕方6時までの9時間ワイド番組で、聴取率調査では番組スタート以来、常にトップに君臨している。しかし、彼は2006年に胃がん、その6年後に前立腺がんを患い番組の継続が危ぶまれたが、見事にそれを克服して現在も元気に生放送を続けている。

彼は「ドライバーは運転している時にラジオから好きな曲が流れると盛り上がるし、面白い話で笑う。常にリスナーと共にあるってことですよね。人は群れで生活する生き物だけど、ラジオはみんなと一緒にやっているという魅力がありますよね。僕はラジオが一番生きている意識が伝わっていると思います」(週刊ポスト同号)とラジオへの熱い想いを語っている。

克也さん、放送人グランプリ「特別賞」受賞おめでとうございます。

(放送人の会理事)

「連載」放送とはメディアである

「録音風物誌」拾遺

松尾羊一

昭和28年、わたしは開局当時の文化放送に入社した。もちろん放送はまたラジオの時代

だった。ラインネットもまだ無いから入社当時、地方局の録音テープを羽田空港に取りに行った記憶すらある。

その頃、地方局間の東京サロンである「火曜会(加盟11社が提案したのが「録音風物誌」という番組だった。

地方の祭事や風物、暮らしを描く月々金10分パートで、「詩」的な表現をまず「誌」(取材記録)に託し、奥深い地方文化を中央に知らしめる企画・構成が狙いだった。

火曜会を組織した地方局東京支社の担当スタッフは中央の情報と各地方の事情が交錯する文化的な構成番組を考えていたと思う。

しかし、文化放送報道部社会班の先輩たちは政治・社会対象の週1本30分番組を優先し、「録音風物誌」や「都民マイク」(都庁提供)などは「ゴミ」と称して新人たちの研修用番組の扱いだった。はつきり言えば新人たちに担当を押し付けたのである。

いくら新人だってそりやないだろう。

しかし待てよ、この番組って案外面白いのではないか。例えば川に囲まれた密集ゾーンの下町気質、山の手の洋風生活で生まれた新しい女性文化に見る意識。巨大団地が目立ってきた緑の多い郊外で育つ子供たちの風情。それに三多摩からさらに奥地の険しい、これが東京都かという奥多摩、青梅山間部、松原村など過疎地の表情など、これらを詩的に構成することもできるのではないか。

ニュース素材一本槍だったデンスケ(携帯式録音機)が描けるもうひとつの役割が豊富にあるのではないか。

予算のせいでプロの構成作家も使えないから自分で書く。独りで取材し、編集し、台本を

書き、10分足らずのミニ番組の視点を起承転結で結び、軽妙な文明時評を試みることもできるはずだ。

「録音風物誌」はローカル局が取り組んだ地方文化育成の志とは異なり、東京では新人養成番組と、当初から制作姿勢は分裂していた。

こんな思いで以後十数年、TBSラジオの人気番組「ラジオスケッチ」をライバルにして早朝の目玉番組を目標にしたわけだ。今にして思えば「録音風物誌」は構成番組の原点であったし、「火曜会」は放送人の心のふるさとであった。

(放送人の会 特別顧問)

入会のご挨拶

青山悌三

初めまして、今回「放送人の会」に入会させて頂きました 青山悌三でございます。

生まれは、東京 神田。三代目 自称「江戸っ子」です。

大学を卒業するまで、神田で育ち、学びました。自分で言うのもおこがましいのですが、神田の粋が染みついています。ですから、祭りごとが、大好き人間です。

さて、1970年 TOKYO FM開局時に入社 40年近く在職し、編成・制作・事業音楽出版事業に関わって参りました。

在職中は、その殆どを、洋楽を中心に番組制作に関わった事もあり「青山」と言えば

「POPS BEST 10」と言われていました。当時 ヒットチャート番組は男性DJがメインでしたが、「これからは女性DJを育てよう!」と考え、歴代 女性DJを貫きま

した。その精神は、現在でも受け継がれています。その中で時代も変化し、女性DJやパーソナリティーの活躍はラジオを含めてメディアでは、欠かせない存在になっている事はご周知の通りです。在職中の殆どを番組制作に関わって来ましたが、その経験と多くのアーティスト、ミュージシャンと出会う事になり、現在でも、仕事に繋がっているのは「ライブコンサート」です。

毎週日曜日の午後、スタジオでの生演奏、生放送と言う、ラジオ本来のスタイルで放送され、17年間、放送されて来ました。生放送ですから、放送当日、アーティストに急病などのハプニングがあると、代役を立てて、対応しなければなりません。

お蔭さまで頻繁にそんな事が起こりませんでした。こんな事がありました。

「穂吉敏子とルータバキン」と言うジャズグループが、アメリカからの飛行機の遅れで本番の時間に間に合わない・・・との事。悩んだ挙句、穂吉さんと親交のあった 渡辺貞夫さんに当日、無理をお願いして、急遽出演して頂きました。それも放送開始1時間前にスタジオ入り。これも「これまでのアーティスト達との親交」に感謝感謝でした。

そうそう、こんな事もありました、やはり外タレでしたが、日本のミュージシャンとのジョイント企画。当日、スタジオでのリハーサルの時、「ジョイントは出来ない！」と。その理由は、日本のミュージシャンが持つて来たギターアンプが、最新のアンプで「そのアンプを使うなら、こちらの音が負けるから、ジョイントは出来ない・・・」との事。そこで、外タレのアンプを使用して、演奏を

してもらった・・・(日本のミュージシャンは怒り心頭。こんな雰囲気での生放送は正に一触即発！)

夕方の情報番組「TWILIGHT TOKYO」(月々木 生放送)では、飛行船やセスナ機を飛ばして、東京の空からの生放送。地上スタジオと上手く中継が繋がるか？！本番30分前まで、緊張感が走った事を今でも記憶しています。

生中継で「緊張感」と言えば、特番でアメリカからの、ロックグループ「シカゴ」のコンサート生中継を企画。FMとしても、当時は初めての試みで、やはり電波状況が一番心配でした。生放送10分前まで、中継が繋がらず、スタジオの中はテンヤワニヤ・・・していたのを記憶しています。結果ですか？中継は繋がったものの、コンサートの途中で中断。その後CDを利用してコンサートと同じ選曲で放送。無論、始末書でしたね。

と、まあ 色々経験、体験を積ませて貰いました。

そして、自分でも誇れる番組が、民放連賞の賞を頂いた特別番組「ちむぐりさ」。

沖縄戦の終焉時「自決」を余儀なくされた人達を語り部で構成、座間味島など慶良間諸島での現地取材を交えて制作したものです。

その他、朝の報道情報番組で、グアム島で28年間まだ戦争だと思っていた伝説の日本兵「横井庄一」の追跡取材も記憶に深く残っています。当時は不眠不休の毎日でした。

最近では、その記憶も薄れてきてしまいましたが、その全ての経験と人との繋がりが、今日の私を形成しているのも事実です。番組制作の他、事業部門では「三太テノール」

など内外の大規模なコンサートやイベントに関わり、ステージ演出を学ばせて頂きました(当時は年間、約1000本近いコンサート、舞台に関わり、それこそ、年中無休)そして、FMでは初めて、音楽出版事業を立ち上げました。この事業は、「FM局で音楽著作権利を有する事は、選曲に偏りが出ないか？」など賛否両論がありましたが、新たなビジネスとしてスタート。後日、音楽業界に多少の激震もあつた・・・と聞きました。

と、まあ FMメディアが最も注目を浴びていた時代の中でのいろいろな体験を経て、現在、個人事務所ではありますが、ブルーミュージック(株)を設立しTVのCM制作(野村不動産 PROUDなど)、FMラジオ番組の企画・制作・プロデュース、イベントの企画、制作、アーティストのマネージメント&プロデュースを中心に楽しく、活動しております。

そして、仕事の合間に、還暦を機に再結成。大学時代の音楽クラブの同輩と共に、ハワイアンミュージックの演奏活動をして10年目。ちよつと認知症状気味ではありますが、後期高齢時代に向かつて楽しんでいきます。

と、いうことで、これからも、この経験、体験を少しでも、お役に立てる事が出来るなら・・・と考え「放送人の会」の会員として、活動して参りたいと存じます。皆さまには、お付き合いの程、宜しくお願い致します。

(ブルーミュージック代表)

第68回放送人句会

平成30年4月3日(火) 於：赤坂・麦屋
選者：星野高士

出席：伊藤祝郎、西川阿舟、新村もとを、
林備後、佐々木光野、深尾一化、近藤久二(8名)
不在投句：荻野慶人

兼題：春灯、囀、林檎の花、稽古(業界用語)

【星野高士特選】

春愁を超へて初演の稽古かな
春灯や廚に小さき母の影
波の背に揺れる春灯かえり船
囀の一樹を鳴かす群ありて

をうな

囀りに 唄 佇み戻る畦

山の端に向けて連なる花林檎
囀りの中に稽古の足らぬのも
花林檎少女は旧き村を出づ

【星野高士選】

赤坂は暮れて麦屋に春灯し
囀や師も収録の稽古せむ
路地裏に猫と見上ぐる春灯
花林檎津軽半島何処までも
小夜曲の稽古も淡く朧月
被災地に七年目の花林檎

うすべに

遠く白近く淡紅花りんご

みはる

大鰐へ林檎の花を見舞かし
病む友へ絵手紙を画く春灯下
春灯に英語読む妻小さき声
口の中赤きを見せて囀れり

光野

一化

祝郎

一化

久二

備後

もとを

備後

祝郎

光野

備後

もとを

一化

慶人

阿舟

久二

阿舟

光野

祝郎

稽古場の花瓶に春の花一輪

轉に脈はふ無人直売所

磐梯をそびらに林檎花つぼみ

又ひとつ春灯誰を待つやらん

春場所や稽古不足の親方衆

轉を伝へて宙の深さかな

抜き稽古深夜宅送雨に飛花

終りなき通し稽古や亀の鳴く

四月馬鹿稽古サボりて恋遊び

春灯の玻璃こしに観ゆ立稽古

【会員互選】

待つてます月夜林檎の花の下

待つのはもう終り林檎の花咲いだ

ふたつ点れば二つの温み春灯

山降りて来てわが庭で轉りぬ

棕鳥の群だみ声で轉れり

ちよと寄り道花りんご咲く小諸にて

バーモントシードル

緑森酒樽の風呂花林檎

花りんご咲きて我らを迎へくれ

岩手山賢治も摘みし花りんご

花林檎受粉作業は今日と明日

【選者吟】

気づかざるりんごの花の表裏

轉と別に法螺の音する御山

轉に川音競ひきざりし

轉や寺門の外に溢るるか

夕べから夜へりんごの花勢ふ

春灯に積まれてうすき謡本

稽古着のまま春灯に寝そべりて

第69回放送人句会

◇平成30年6月5日(火)

◇於 赤坂・麦屋

◇出席 伊藤視郎 西川阿舟 林備後

佐々木光野 深尾一化 近藤久二 六名

◇不在投句 荻野慶人 鶴橋康夫

◇兼題 百足 螢 夜釣り 待ち(業

界用語

思ふまま闇掻きむしる螢かな

寄る波に鼓動合ひたる夜釣りかな

野に寝かす母少女めく初螢

漆黒に光る鳥賊の目沖夜釣り

手明りが消えて夜釣りのまた独り

螢とつて蚊帳の中へと放ちけり

切り通し我を願使する赤百足

夏特番迫る夜明けや化粧待ち

百足行くドミノ倒しの足さばき

酒盛りの窓辺に螢途絶ふ聲

釣れますか宿の女将の来る夜釣

百足虫にも馴れて覚悟の山ぐらし

螢にも飛ぶ順路有り待ち伏せむ

歎きながら妻庖丁で蜈蚣切る

捕らへたる刹那に放す螢かな

小梁よりぱたり落ちたる大百足

チェロの音が敷に零れて螢飛ぶ

その昔祖母は百足を油潰け

おい百足汝は歩めるや走れるや

待ちぼうけ紫陽花を背に自撮りかな

波待ちのサーファアの背を焦がす夏

耐えてきし不安噴き出す大百足

抱き上げてそこひの犬に初螢

螢の夜一会の夢に永眠るかな

裸婦像にまどえる風や螢の夜

螢川螢は風に流れけり

夏至の日の日没を待つ海のロケ

稽古場の窓のあぢさゐ役者待ち

見つめれば回れ右する百足あり

片頬の暗く漕ぎ出づ夜釣り

康夫

康夫

康夫

康夫

視郎

視郎

備後

康夫

阿舟

次回放送人句会

◇平成30年8月2日(木) 17時半頃から 投

句締切 18時半

◇会場 赤坂・麦屋(赤坂駅7番出口左隣)

◇兼題 中元 いさき 椰子 テレビ(業

界用語

☆選者として星野高士氏が参加されます



会員名簿

2018.6.8 現在

【あ】藍澤幸久 相田洋 相本芳彦 青木裕子 青山悌三 秋田和典 秋山豊寛 天野澄範 雨宮望 新井和子 【い】池田正之 石井彰 石井ふく子 石橋映里 石橋冠 石原信和 磯智明 板谷駿一 市岡康子 市川哲夫 市村元 一色伸夫 伊藤雅浩 井上佳子 井上良介 今井義典 岩澤敏 岩瀬 弥永子 【う】上村忠 浮田周男 碓井広義 臼杵敬子 内山洋道 【え】江川雄一 江口展之 榎本恒幸 遠藤利男 遠藤雅充 【お】大池雅光 大川光行 大蔵雄之助 大沢悠里 太田昌宏 大原れいこ 緒方陽一 岡野真紀子 岡室美奈子 岡本勉 小川治 小河原正巳 沖野暲 萩野慶人 尾田晶子 織田晃之祐 【か】加賀美幸子 柏木登 片岡敬司 勝部領樹 加藤滋紀 加藤拓 加藤義人 金沢敏子 金平茂紀 加納孝夫 川平朝清 鎌内啓子 亀谷弘美 鴨下信一 川喜田尚 川口健一 河邑厚徳 【き】北川泰三 北川信 北川祐美香 北出晃 北村美憲 北村充史 木下浩一 木村成忠 【く】工藤英博 久保志穂 隈部紀生 倉内均 訓覇圭 黒崎博 黒沢淳 【こ】小池勝次郎 河野尚行 小玉滋彦 後藤和晃 小林和男 小山帥人 近藤一男 近藤邦勝 今野勉 【さ】斎藤秀夫 斎明寺以玖子 寒河江正 坂元良江 桜井均 桜井元 佐々木彰 佐々木光政 笹山正勝 佐藤幹夫 佐藤理恵子 佐野有利 澤田隆治 【し】重延浩 重村一 重盛政史 静永純一 志津木敬 四宮康雅 柴田陽一郎 嶋田親一 清水誠 志村一隆 下崎寛 下重暁子 白井博 新山賢治 【す】菅野高至 菅野嘉則 杉田成道 鈴木昭典 鈴木俊樹 鈴木典之 鈴木弘貴 鈴木嘉一 須磨章 【せ】清野豊 関佳史 せんぼんよしこ 【そ】曾根英二 【た】高島秀之 高田宏 竹中一夫 武本宏一 田澤正稔 田中昭男 田中秋夫 田中直人 田中則広 田原茂行 【ち】崔銀姫 千葉邦彦 【つ】塚原あゆ子 塚本茂 塚本幹夫 辻本昌平 土屋敏男 つボイノリオ 露木茂 鶴橋康夫 【て】寺島高幸 【と】東城祐司 堂本暁子 戸田桂太 外崎宏司 富沢一誠 豊原隆太郎 【な】長井展光 中尾幸男 中込卓也 中崎清栄 中島僚 中島由貴 永田浩三 永田俊和 長沼士朗 永野敏一 中町綾子 中村敦夫 中村克史 中村季恵 中村芙美子 中山和記 並木章 【に】新村もとを 西憲彦 西村与志木 西川章 仁田豊文 仁藤雅夫 二宮文彦 【ぬ】沼田通嗣 【の】信井文夫 延江浩 【は】萩原豊 橋本潔 林健嗣 林安二 原由美子 原田令嗣 【ひ】日笠昭彦 玄武岩 【ふ】深尾隆一 藤井チズ子 藤井正博 藤田知久 藤久ミネ 藤村忠寿 【へ】逸見京子 【ほ】堀川とんこう 【ま】前川英樹 牧之瀬恵子 増山麗央 松尾羊一 松平定知 黛りんたろう 【み】三上義智 水上毅 水野憲一 光原朋秀 南譲 三原治 三村景一 三村千鶴 宮崎洋 宮川鑽一 三宅恭次 【む】村上光一 村上雅通 村上佑二 村田亨 【も】本木敦子 諸橋毅一 門奈昌彦 【や】八木康夫 矢口久雄 矢島良彰 藪内広之 山鹿達也 山崎隆保 山崎裕 山路家子 山田尚 山田良明 山根基世 【よ】吉澤保 吉田賢策 吉村豪介 吉村直樹 【わ】若松央樹 和崎信哉 渡辺浩平 渡辺紘史

【賛助会員】 日本民間放送連盟 TBSメディア総合研究所 融合研究所 日本ケーブルテレビ連盟

編集後記

▼編集部に届いた会員消息から2件▼高齢組の一人、寒河江正さんは、テレビ神奈川で企画立案からスポンサードまで独りでこなすユニークな番組作りで知られますが、3月放送の開局記念企画『ことばくあなたの愛する日本語は何ですか？』で、キャリアの有終の美を飾りました。氏の熱いロマンティズムと放送人としての矜持には心酔者も多く、社会活動も忙しい。ちなみに、氏の愛する日本語は「誠実」の由▼テレビでも映画でも注目を浴びる鶴橋康夫監督の新作映画『蚤とり侍』が、前評判通り大ヒット中。監督は封切り挨拶などで目下疲労困憊、舞台上で足をもつらせる始末とか。先日の方会総会には出席、懇親パーティーでは若い受賞者たちに囲まれ、巧みな話術で沸かせていました。映画は、殿の逆鱗に触れた堅物侍が命じられた女性相手の添寝業（これが『蚤とり』）に刻苦精励する下世話な巷間話で、艶な春画風シーンも呼ぶ物ですが、さりとしてアウトロー目線の無頼に堕さないところが社会派鶴橋マジックの真骨頂。目をたのしませつつ頭も使わせる余韻を誘います。キャストも超豪華で、一見に価値する破格の時代劇誕生といえます(典)

▼放送人グランプリの特集です。28ページと分厚い会報になりましたが、受賞作品については少しわかつていただけたかと思えます▼グランプリにノミネートされた作品、人物の資料を掲載しました。前に付録の形で掲載したことがあり、そのときは「これを見ると自分もノミネートに参加すればよかったと思う」との声を聞きましたので、詳細なコメン

トなどはいっさい省いて、番組名、人名などにしぼった資料になりました。資料は菅野さんの懸命の短期集中作業の成果です▼そのためもあって「いろはに時代劇」は残念ながら今回休載です▼放送法の改正は国会の提出は見送られましたが、放送業界の注目を集めました。前川氏は長年にわたって放送行政の当局と実務的な折衝を重ねた経験があり、今回の論考はその経験に裏付けられたものだと思えます▼この問題に関するシンポジウムが4月28日、新宿歴史博物館・講堂で開かれ、その記録は「放送レポート」7月号(6月中旬発売)に「放送制度を問う」と題して掲載されます。出席・桜井均、鈴木秀美、砂川浩慶、原真、司会・岩崎貞明。このことは、総会で鈴木嘉一氏から紹介がありました▼受賞作の「ゴンザ」でゴンザが作ったのは露日辞典ですが、露和辞典ではありません。英和、仏和、独和、などの和訳を意味する「和」は明治以降の使い方なのでしょうか？私の書棚を見ると中国語辞典、韓日辞典、日韓辞典など「和」を使わない辞典があります。漢和辞典との混同を嫌ったのでしょうか、日中、日韓の歴史の微妙なかげを感じます▼今回量が多いこともあって、文字入力のむずかしさを思い知らされました。私は迷うと、古い版の広辞苑、朝日新聞の「新聞用語の手引き」を開きます。古い広辞苑には「むづかしい」の項に「むずかしい」とありますが、「新聞用語の手引き」には「むずかしい」の項はありません。今書店の店頭にある広辞苑の7版では「むずかしい」をメインにし、「むづかしい」ともとしています。文字入力はいくらだわるほど「むずかしい(想)